

英光錄子

上



根かしうつる巻之九

河合宗臣 輯録



河合氏

一 括大筒秀吉公と中村公ハ天文五年丙申の夏御印上刻尾張重光妙郡
中の中村中村ハ上中下の民亦よ誕生ふしくう父ハ中村弥右衛初の名ハ助弥助とて称せ
城の太和守の後廻の者ぢりしが很多の創と蘇り軍役勤うざきより奉公と
辞しを主所中村の里より陽徳せり一談す秀吉公の仰母を持萩中納言のゆゑ
出意門故而え尾列村雲の里へ死流せらき所より毎月と達う詔ひしが長年
の公休此きよがの事此あまひあしむに傾く日と詔め取らひす

詔うやる船の日より村雲の川より往來とうさせやうけり

とある條じゆひくる頃是中納言死所あり改す身あめりかひこう中納言北
後室多を後ニ第二御りあつる身あ女とてより都より數多故す初見し
るタるがをほ無れ死す京都と拘つて發至京タくわくうきとも彼身女十
八年の内又尾張より來ひまうち三年後津と十一年の時歸らるる處此と年

月と西らきる程よ女子一人と男子一人と設けよ女子を成人の後日を海東駿
ひえ府の民弥助ミツヲとちつ者よ第一シヨウの弥助後ニ母武藏ムサシとよちつ又三位
法平一路と称ひ幕マグ公秀次丹波守將兵關太和中納言秀俊由三人の魯ルとし
一人の男子よつるをタク公大政大臣侍一位豊后秀吉公の由車也彌右衛尉昌
吉天文十二年の夏病死せらきて後を後室二人のと教育して被室より住候うる
有子を成城信長公の門附よ筑所跡と云ふ者あり様子リを公萬葉を故郷をも
だ中村より居り居りとその主人歟カと云ふ者有るが後室の家へ筑所跡とみえま候ハと
是秀吉公の法文也於て毎月年譜なる程よ男子一人女子一人また男子ハ初名と小筑
と云ふ後は母紫少婦秀長と號ひを後弟虎守と存し修大和紀伊和泉の大守
と名うて大納言ト仕一筋の天正乙未年五月二十二日逝去トテ三位法平一路の三男
四郎秀信と表字すとて家と號り所と宿中納言よ住し候ひをもが海源と号す
と様次リの池より水を漏れそ死したるとき秀吉公比童名と號所跡が子
かきばと小筑と云ふとて大なる誇り小筑と名せ一と云はる長の事ナリる

又一人のゆゑを朝日唯年とすて 深君の門墓とけはるるう程なく門脇をゆく
せう南畠院殿とすましは山中事之秀吉公を慶長三年戊戌八月十八日伏見城
より薨去。終のう所年六十三國葬院殿俊山雲龍と謳一す。洛陽の東
南所跡院奉事。幕りす。後陽成院勅して廟號と豈曰大明神と賜り。る
一天正年六月二日信長公生害の後細川義孝博陸の門為而額與行先
と左佐野寄よ放て被け。きく。

墨澤乃々や名は。被の霊

藤季

おもつる野乃月の秋風

聖護院

ちゆつめの松虫

白

一日十六年癸未嘗て勝家滅亡時をかく小谷の御方よ詔下るハ身を信
長公の門徒の色を塗と生させ泣くがとあしすよドとソナリ色とも更に承
引か。り。彼曰く楚斎の夜の美楚王。庶民。が泣き恨と私やと思ひかくをう
れ。其處の雲井。よわづ色別れを惺し仰り色を小石。御方

勝家

そしゆくおゆる程と対の別色とぞ。時も。邪

文荷舟。去者第第三。あツミ。不差。因じ通す約もんとく

筋りあきや。峰。一。通す友。ひく。後の事。と仕へつら。那

とく。浦。うだ。を。人。と。袖。と。ど。め。さ。か。と。対。と。勝。家。を。京。都。至。る。と。と。上。村。六。代。の。尉。よ。こ。
車。なく。生。害。を。ら。れ。を。縫。と。留。女。三。十。岁。ノ。日。じ。石。縫。と。酒。ノ。よ。る。と。と。卯。月
高。多。申。別。孤。是。序。よ。う。又。勝。家の。歸。事。多。是。真。女。と。と。上。村。六。代。の。尉。よ。こ。
と。と。ひ。と。心。辞。よ。称。や。て。観。引。よ。を。末。多。多。

今。う。よ。六。五。レ。假。の。日。比。御。以。准。一。よ。か。よ。か。し。ゆ。る。う。が。

息。女。を。あ。な。じ。取。す。く

は。基。サ。ト。谷。の。方。の。

思。ひ。き。や。布。田。の。軍。北。萬。の。轟。ち。く。と。と。消。ゆ。る。と。と。

さて上祠と从備よりきりいひが爲め宿泊を以て打合して立候う腰十文
寫よせき切く日し松よわしよクの衰ぢりし事ども也山林の經年よ

その事まで城と被りある勝地をちゆゑを常とく據とせりする
佐久間を盡免を生捕をくふ奈河原主と首と別ら色々うそ付観と見てがくん
此の中とめぐれとしな小車と火宅のかどとつづるぢりすり

かく色とあ變ると討色う思ひ事とられし事を有一ものと

一天正十九年三月組の秀吉公大坂に附登甚有て左列、常向、西尾、猪子、坂井、
六五路際などはやらせ事には音布只處の内志有く阿弥陀寺^{アミタ}有
名主元帝女院を分半家一門の神社御院有て一首の由詠ひされ
供奉の今と同様く和音と稱せらしきる

算白矣

彼のそれ致りし跡とことへと苟かずとひし御う角

相手多母守頼隆

さの主名斗笠在かゞら姿多くのみり其のあけやひ

佐々尾奥守成政

名主一あむちの海とあよみ色は、暮とまの其の浦泥

山名徳高

右圖記

一連承認之記

ふとし天正十九年の初、傳陰屬下九列大友家^{シマツ}陣の経補とそめらば
こうや進發の事有、是と一節に言萬免系阵の上、其との色入道ヤイ方
かくば、供奉の事もよからず一吹、ちりり切る沙陳^{サジ}の程とつゝよをかと
定め一き必便^{ハシメ}て、署十才より舟を燃屋郡まで出でて、古田四邊とぞえを
日暮を満止す、たゞ松井を破^{ハシメ}松倉^{ハシメ}すと云、明るハ赤旗^{カニ}をのせ^ス、
又限あく身自體^{シムヒ}をなしかば、松井子^{シマツコ}禪門^{ジムモン}と云、且て柳湯^{リュウノ}を、益^{マツ}と
あして歎^{ハラハラ}し、坐^{ハシメ}すありて毫目^{ハラハラ}とよく晴て風と追風^{ハラハラ}なるとい

お立と坐ら山ちやけをと

かあらひの旅の行本をよ一泊ともさわらみふれりまし

軍事は、欲せ則莫令ト間、軍吉山とあひ、おひよきり、かすよも漫と
云ふう辰時より出船、その日は朝は但馬因幡の境、夜はとお和は舟
をうしる、旅高いとおせきく上なう下らうが一とき、かうむーゆく

毛屋の旅は、西色毛里の名の店をよ一泊の宿、南
庄右伯齋國三でなう、舟を出でて、お雲國に保の岸コテ不動一寺で
至れり故てひとねはよ一泊の浦と、毛智船とぞめく、

舟よりあるがまの浦のア流のをもやかと名あへん
かすよはまひく、まよ音、ちゆき、かよ音和僕人の歌よもあらぬ
何つきよといあて乳とのひあまれ子の、のやうやあれさん

庄右伯風氣をかよが、舟あぬ難セキのと船人十角カタツキ、さらそつと
書ましをねうーと船と、湯元とあつしゆのて、并籠ノ宮スルの爲

望よまたとらむ、道の程三里をあはゞく、本深にて山のうちをまひ、住すま社
有と、えめてて神人と是へてよるゆりしよ、おぢん佐化サタハの古社なり、神辭い
さあきのきもの多と、教へるよ、あらへお詫セキ一介、日とこひ思面といへくふ
き、衣ふらん船のあう、來、しづぬ

千呉振神のマーラや、天地とわうら初つる雲のみをやら
在宵佐除アイカとあて秋鹿アシカと云ひて、湖水の小舟は寧て平田ヒラタを以て、生浦
すうと、舟人のいふとまうと

御船うみやあられ、浦千鳥見て、あらとましる名ぬよ
かよよーとまゐる程よ、きのきの村はまて、宝麻タカマと一穴、末社有二社
かくえりて居ぬよ、此社神官、千家小鷗、向コフ國造ササと云ひ、
毛魚モロコと云ひて、毛後膳モリツケと云ひて、雄葉シイバ叶シタる飯杯ミツバのと、
舟身ボウジンの如よ、若列カサイ葛カズラと云者有木カツキ、射ナシしりる、太鼓タガう人ヒト、
着マツル見る多く日過有て、一泊中ナツクは使はせば、舟を催アゲルす、西西造

うちやつまく音指せば、後を送らきへり船は、蓬穂の役者たきこみを也文
それ年有りてひがめ事ありて

お香物をはねましつる者たびにあて急き舟をすま日とこひよりうどく
あらぬとくーとく

この神乃を一りまよむるよりもとがきの神ぐものぬくん
遠于素戔鳴尊ミタマ到出雲國初有三十字詠一あれも、やまく一字の数を
あきするゆど、もゆもあくと云ひさーぐと、あ國かきは一方へいくとゆし
のをりゆ、俄の色は用房と島とゆき文、古社本體ハシマノ聲句不原ぢきは
卯のまれや 神のいづきのゆく

筆は書やうるよ、千家うちくの聲句を小萬子を連音とすべし、吾方そと
面額毎行を下と、舟を守るよ追付て聲句を宣ふいをがハーヒキヌ難美
物をえくやセーうた、ホの名をやつりなくナさける船よ、人のやとやくし
とも、つひうてれれれれれをとせんの名、云けぞと

郭公 あすの りあや くわく海ニマ
古有石見の大うと云ふよあると、歌の内ハシマと云津を以よ、石見の
浦ハシマあきと云古車ともううと、か詠める歌山の、いと不ふたちうるかとまと、
二きりと

あきやこのうき世とめく私道石見の歌のあきなみ風
至りだごを船山へ、歌くらむ、やまくと云城、在不のときもと見立
城の名をぶとまうちきやまうらと歌るあらうととまうきよーと

やとうる善因寺聲句不原度幕ハシマ相の有とまく

浦山本の中よ 夏あや つうかうと

温泉の津を出で、室塔院ハシマとぞうちを、とを連舟え一巻そじにし
事など、とくとよや出ぬしよ、五月三日高台不原ふと、壬申ハ百韻とく称

経りぬ

宿の 宿舎 そと湯あけを取船うか

五月あ私まよ江をよへし強ひまへきはる、而金を色へあるす

うきるの 松木切り色やくらや名ふ

七日瀬田と生すにほむ高角タカツと云ふと舟の丸くつて、石見がたうの
松の木のるう瀬田の日を見たものう御おど、一説は名とゆる高角山の木の
るう御出で人を海せし車只ただあく

うつまひ世よと達み色とわとせ名にむ角ねの上のよ

あくと長門をまつて、波の上の鷹たかとス原はらうけ、ツリ鳥とりとも木有もと空、誰

と重おもい行者ぎしゃは車くるまとゆひ出だく

皆人のいのちもと取うりとせまつての むすの うくうく

あかしき玉浦小岬こさき云溪くげ今、度たび船ふねひるて五里ごりと、舟ふねの月つき詰つり色いろ、さ

らをそあさんと遙とほは舟ふねとよせ、志しをしきりく

船ふねをゆく浦うらつづひてこまくら夜よ一いつ船ふね一いつ溪くげ

あこのうう波なみのこかくややへ色いろも

少すくなくみのうよあくやあくらんうう音おとにあこの浦うら

十日瀬戸過くわと云いふとあ私せしよ、風かぜうくす高波たかなみ、まハ船ふねすこしむむけ、石
見いわしいわる者もの、ゑひのれ吹ふきく、色いろとええる群ぐん色いろ、まくハ漕尾こぎひへき
ゆゆとええ、山やまうけ舟ふね入い船ふね、止とりよハ色いろ、さきととる墨すみとひのれちんてんる、
かうううとせううるををよ高たかなな、松風まつかぜくちうくちうて竹たけ木きととくああはり、海うみ
雨あめ、やまととくうる、何なんかかくくもあくねね、そくくせんせんる舟ふね、舟ふねの波なみ
すや船ふね雨あめ止とり、波なみの音おとしはすきわのくろくろ色いろ、舟ふねの生なまきねねをあし
かかと、船ふねまひあくあく、さらさらら、あすと幕まくの酒さけをひくまく食くて、る杯はい備そなええ
て、十日セとさきと坐すわく大寧おおむら寺てら大内だいない天陞てんせきの景けいらをし和わとテテ一いつ船ふねよ、
ええあて一いつ見みし、うきと瀬戸うらと玉たまけ歌うたく、月つきとめ葉はとまよとくうる、佳よ持もち
の和わあらきそ、薩摩さつま仙法せんぱのあ詠うたかとみそ、つとみの河かと、あて行ゆきて
ささちをきよとくとめめのと法ほうをむむうよややてと色いろ

筑紫海舟通貫十方よりんは、是れ者と、空く難く、豊浦宮と行進を
水うちる池の心の深きとことよられ、言乃ほきみをしーる
ここひと云を所え、せひひ仰りを、かうのやうはあうをと、下く是を流す、
まのあき、ひとき林をとせア行う

五入らうて流る是のまわけ、馬くらひと人々のみ見ん
國、海はそぞ、阿弥陀寺より仰まをゆくは寺を下の人内裏とうん
玄徳、玄房は葉月と安徳天皇御教、玄界平野一門の像を尼約多、
被修尙今の姫母かと名をきづけ、おまの歌をあじゆ
毛一はまかく被とヒタカラヒテおまうの海の波の名ゆ

空林圓門圓の聞ゆく

古卿よこゝのとやせん一筆をひきやほうんをい草守
鳥根每多くつひと有とんく、くらなーの波ぬきをきく
木あゆきゆくらもあゆくわせを積むらかの渡

豊春の折浦名々と發向不至セイ

空国の山うちあき、あ苗うねー

日月と言布簡屏をぬく行ひよ、あと落葉と波風のあらきあよ、小倉はま
里く夜とこうと、舟をさへいひを列箱舟とて行ふ舟人のこきうん金、
御船と云、首檣と水の舟は安て本く、汀田くめてたがーと、今は有と云日和
のウニ釣ハ龍頭杯リラッヅ、船の舟と船の舟を金と云字とおうと
差へるが、峰をと有と林と、友とも杯を詰ひるひは万葉よ、我と主れ
を、あとのち取神と妙境鏡と車杯豆ひゆく

蓄まするのの御舟を以舟よまれを高き人あるの夏

うすよ云ことをゆく、こきひ船よ、夕潮あらくぬと、やうと志望の鷺よ
志工、金剛山の玉田坊よとよ、喜日麻守多社同一即ちあひの神
ゆうと妙境有

三笠山にてやうよぶの湯神のちめ入のへてゆけば

源起などあつてゐるをうなづひ。

波あらき塩干の松のかづらで萬うづく海の中邊
あはあ社の山^タの尾社傍の傍らをくる、又香椎の神詠^ハ、少しつくと
白蛇うづら有、立生^{シナガ}ゆきる神のを^テ三黒計りと、海の中
までく、當^カつまむに力有りと有^ヘた、文殊林もあはし^{アハシ}せ、格
ちの草木、思ひくらき、あ社^{アハ}安雲^{アベノイシラ}城良也ともて、神功皇后天
御退治の時、毫高^{アマタカ}出^ヒる船の檣^{ハタケ}にて、海上のあへせし船也、あはく
うち能のく

名^ハ一あは枝のあは源とて波とよびかうとの才^ハを
はあ角とあてす御して、サ、外^ハ望^ムの程^ハ、荀^ハよ^リこまを^ハる、松木を
も^リてき、八幡宮ハや萬^{ハシモ}ひの^リを立^{ハシメ}、戒定惠の三事の荀^ハと、ひづ^ハ埋
あき^{ハシメ}、あはしの松^ハとも木^ハ、さちうづく
そのゆみよ想^{ハシメ}う岳^{ハシメ}る箱湯^{ハシメ}のね^{ハシメ}千代^{ハシメ}のちしぢり^{ハシメ}色

日高^{ハシメ}ゆきは情多見^{ハシメ}、あはりま、爰^{ハシメ}袖^{ハシメ}の溪^{ハシメ}、里人^{ハシメ}のゆ^{ハシメ}きは
いさくらも^リも^リ湯^{ハシメ}ん旗岳^{ハシメ}神^{ハシメ}の溪^{ハシメ}の流^{ハシメ}のよく^{ハシメ}
日^{ハシメ}を^{ハシメ}ぬひと舟^{ハシメ}を^{ハシメ}、萬^{ハシメ}一^{ハシメ}千^{ハシメ}年^{ハシメ}を^{ハシメ}神^{ハシメ}の溪^{ハシメ}
た六日寧府^{ハシメ}天神^{ハシメ}の位^{ハシメ}不^{ハシメ}と^{ハシメ}、^{ハシメ}見^{ハシメ}あはり^{ハシメ}、^{ハシメ}被^{ハシメ}官^{ハシメ}寺^{ハシメ}
七^{ハシメ}を^{ハシメ}、^{ハシメ}寺^{ハシメ}、^{ハシメ}炎^{ハシメ}上^{ハシメ}て、^{ハシメ}御^{ハシメ}御^{ハシメ}佐^{ハシメ}、^{ハシメ}佐^{ハシメ}御^{ハシメ}御^{ハシメ}佐^{ハシメ}
よ^リ、^{ハシメ}磯^{ハシメ}、^{ハシメ}後^{ハシメ}青^{ハシメ}山^{ハシメ}を^{ハシメ}、^{ハシメ}有^{ハシメ}乃^{ハシメ}七^{ハシメ}角^{ハシメ}、^{ハシメ}般^{ハシメ}、^{ハシメ}御^{ハシメ}御^{ハシメ}佐^{ハシメ}、^{ハシメ}佐^{ハシメ}御^{ハシメ}御^{ハシメ}佐^{ハシメ}
西都^{ハシメ}を^{ハシメ}云^{ハシメ}、^{ハシメ}象^{ハシメ}和^{ハシメ}古^{ハシメ}本^{ハシメ}、^{ハシメ}曉^{ハシメ}切^{ハシメ}、^{ハシメ}若^{ハシメ}の生^{ハシメ}を^{ハシメ}育^{ハシメ}と^{ハシメ}そ^{ハシメ}
え^リ、^{ハシメ}深^{ハシメ}川^{ハシメ}と^{ハシメ}黑^{ハシメ}川^{ハシメ}を^{ハシメ}足^{ハシメ}引^{ハシメ}ゆ^リ、^{ハシメ}足^{ハシメ}引^{ハシメ}ゆ^リ、^{ハシメ}も^リ
ま^リて

巻の流^{ハシメ}も^リよ^リを^{ハシメ}條^{ハシメ}川^{ハシメ}や^リす^リて^リあ^リも^リも^リ
あ^リ入^リ川^{ハシメ}

く^リ木^{ハシメ}の葉^{ハシメ}や^リあ^リべ^リ入^リ川^{ハシメ}。

爰が一ニ見たりて、ゆるを送り、かるやのまの跡有り、あーぐるよ、今後の陳充
名のことをゆるを事有りと、つゝりし

左の山をゆるとて、陳ううと、無縫足、やつらの軍
叶次より上山を何くと、葉内を下居ーと、シテの左よ高き山有、是な
んをと云、蓄參竈門山、宝室寺と山伏の住る所と有ると、山主のひく、も
橋と云者城郭よあしらつて有るが、去年鴻澤寺、あくまでも岩屋の城段
有りし時ちのけよろび、けい山伏のゆう住キセーと、背みの名め雲のむくと
不、おれを

立つてく雲と千里のタリモ能ふ民の少ぬとしやか
可也山主

萬うぢやの山ゆうへ唐を被ふるを極すゆゑしん
姪濱うう人の安吉の服をわざく、自利を銘かと、能作りくへ、至る能く
と文あり毛尼草ト

立々さしの代あしとハヤシよしのむがこふ一きいのをぬう南
才八姪濱と云ふ事、をきうう生の松原とすまく
ちーこと風のとよは事引ん今いくさくハ生の松原
姪濱を或人、宗義林多くしし慶喜の懷紙、其を奥書而書きしは
二毛と又ある色そ一木のゆくきの跡のゆくみと書く
六角音陸渡鳥徳育住持、耳之年金林和島和漢風行有のきを發句訓
原有しよ、云儀は罰を内感のゆ古有ハ、張りハナリサカシトモ、聲白と書
きして、入韻を全せしよ

夙薰る南とすのと風をうか

社同六月毒

日、利休居士、園白殿渡河赤靴を、被一わと私れ儀を交わつて居る
今世あきは箱寄八幡のゆと

神代もとおもつて拂し 松の風

書道場一を主。対の取の月。松

松

日野新之助書

ほのゆのと明月。室の五壁。日野新之助書
箱根八幡のうち。幕白殿ありし所也。衣冠上セ一ふ。もと一ノ松より。説言
のゆとり色也。

つるきども寫すあさりよ。箱根の松のゆきと君代の友
関白殿箱根の松原すく凜々と。古石奥やう色、あはしゆ花鳥の
事有、音もさくあり、謡も有て。あ當有一ノ

主上御のみかとのナホシナカニ。松の浦

菅原モ。松原モ。松原の名あ是か。人々へ。あまつて。せりや色も
松原モ。松原モ。松原の名アシカヘ。くわゆらぬ。かへるさのみち

六月廿九日。香椎の浦。尼もあらう。

うか原や。波宿ちゆゆ吹風の香椎乃。口うら流しき。一と

ゆき。すまねども。ちるかなるひよこのとくとく。くわら波よ。かちよ。行く

おもかるのとす。ひとかづ。仰ひよ。ひよのく。年名。一。箱根の松
船の使のとく。あまよおのとく。行く

李因和歌韵

始。感。逢。君。情。所。一。鐘。向。朱。相。約。鬱。聞。窓。

帝。都。門。名。莫。云。遠。千。里。同。風。一。樹。一。木。

名。沿。の。う。や。山。乃。志。風。は。拂。一。さ。あ。ま。ナ。ミ。の。み

登。ウ。

そ。ゆ。一。ゆ。よ。こ。ち。く。う。と。る。や。雲。の。峯。

六。月。廿。九。日。一。ち。可。二。張。初。一。と。溝。口。大。坡。危。石。空。は。

沿。の。高。と。秋。風。ち。か。一。山。海。

あ。湯。す。ゆ。ひ。か。の。す。き。ひ。よ。す。な。よ。う。こ。と。日。し。海。無。よ。ま。や。

と千家易うら云お一そゝる尼寺よ

あぬさかるをかすを粒をいぐむかき、うつと同一 海世の事

古七日關白殿花箱數多れあまねく、御事とせらきする脚羅多め、偏よ
一物は備え多き仕事あるへまほあき

夏まくあれかかくにとむとう節

さく一そ東平のさこうこれ月

松

あまの筆の筆筆のむすとつといあそ

由己

七日關白殿花箱波うち門屋は風、船を多陣せし程ま、弓かととがし、舟
とまを南の海とゆて、すむと定う候よ、秋風日暮りくちうか船は

らく、六日と医者一候も、思ひつけ

あきと吹風やせまの渡と浦り舟

六日とくいと船の出うこ風なれば、周防山口為見ぬ在所のあとあ馬
傍出で、船本と車あむけ、七日は山口はすみ、今平ハ七夕の意平ちう

遅る一と、九日

かひと、曉のこの森差す

七夕の別の神々くらべよ蟲かづくは 箱の衣 斗

斗

八日と寺社見ゆうて、日國二ふの天神近立あつて用意セ一は、あま平

中守役持一念無行あつて、かねはとくら色仰をば、ちゆくをくを日暮

遅る一と、九日

三日とくいとよ一と日の 本のもの

古山口とて、金府天神、あまく、あまの浦をき回もひて、毎のまよとゆく
体ひどくよ、古社の供傳多事妨古の而を有て、一面をうつてのねーと
鳥行行、入相の時令うかげ、古すと船子百韻あんづる、壬午舟志古
往遊あり天神の所をひひと氣假使うちこひきる

至つるよより こそ 風のよぬ

田舎の溪を、ありゆの浦を見ゆ、網の多くかけられてあざと
あ砂地すあみをうつてあをすと浦の内をたへつ

十四日 晴西志ままで、天日參上之幕と氣と、舟筋にて御行をままで、汝は
引きを、舟あと催しめよ、岩手山とて見るを

十三日 晴天とれ道を下りてあるをき 岩圓山とてみちをしらん
それうち岩鳥ちかくちうて社改と見て名井登海の面二町計りと差小走
玉、廻廊と、柱をみる事多つうもあり、舟を見ゆ

十四日 鳥の下津 岩根の官吏へ一派の上うきをもる

地報と書てあ社棚守れ近府監方へをしる、ゑく有て月をぬ色を立て
東もと見るま、塙干波酒月のあよかうて汀三町半りとを道すゆゆ、あり
塙乞唯大海の象と案組賀作く、隣りゆゑ、又大聖院良政廢の不臣
有て十三日一會あり、あ社よりみの池と云有れど

移うつを日や りみの 池の水

吉日棚守連が與行をひきあひてよ、聖なる日ゆけぞり、ふつきりきゆ
有へきと、游退志多よ、さくら桑の叶に拂ひとせむ、虽然ゆる郎公の色を

秋冬するを山志げ山 郡 公

十五日 仲^後、さら^晚晴あり、しきのきはいへ行るま、ゆくの音求て益
あき色と子思が捕三郎坐りあり、私年うり服持と半て正側りと、やだせ
うと奥坊と云ふ、左音の玉毛れ自身半て捕へ盡るよ郎公の二声三声
なりと、あよびの音毛半て有りと尋しよ、跡跡半じと云、一音と讀てをしる
あての山あくとあつて杜鵑を多く車の音半停ぢり
十者官鳴神箭を延年と云草あらじと、足利して夜すけ、は船をかし、そ
の海すまうゆうて、また備後津、公儀門前御手紙上して、十八日^朝朝すもこし
竹田法平候の宿は色々と亭など有て深しきはあれど、立あて、草書
よ故自重て、書あひ船をあはててまと云、ハ桑の木を也
あはれあはれと、舟つゝかみと舟と舟

さん^前車舟といふを以て、明方の覆よ、船中曲をうき御令と云ふ

是れあれど、嵐つゝとあうちやりとつと

昭和の文藝とやら。宣傳局の山のまことをもん。

十九日備前之内ひらと云ふも有り、至る所多程々、空の鴻^{クシマツト}にて行て舟を
ゆけむと、軀^ヤくあらのき里^{アリ}といひ、すこし北を梶根の月差すまゆ蔓藤珠^ハ
舟は舟で行むれん日はさへかゆうしゆとの御りあり矣
今もう月の夜舟^{ムレアケ}をまよは、光明の瀬^{アシ}と云ふ

船風の歌。——もくはきを寫すと、むすびの
風物の歌。生の浦の歌。人里の歌。旅宿の歌。

又波の上の漁うち張の舟をひめりまわらるる
舟角ありて漁舟は船頭にて橋岸の室を行進す、坂と並んで
と云ふ不景、そもれきやうるる端の舟と云ふ也

塔多とくよき船物語
江の島をへて入る
古明方とて船をかし、家鷗をこまくうるそ
ハナギリ舟をひいてあきよせん秋家鷗と相ひまつり

娘既上云城と船は見ても行船は、志がまんちあきらう海の島渴りる
と、舟人よ弱多々、水手よ大雨う色は妙無事有上云
水手よいく村あう志クモ内 ヨーフキ酒よあそ集ヨリ
弱多々折れめりひきのむきと濱色くちゆの浦よ船と魚て、モ取ハ泊リ
弱多々の尾上のうきとね風と御ヨリヨリの浦よこくへ
是日松原の浦尼高也さんとせせ翁の曉海船こみちを望、相馬のりうち遙
風と行船よ出けまくると桂宿萬よらり

江舟の返風まほと明石の行船と月とを記す
さて松風の浦也くかれど、舟と名ふるはす、浪うの月輪もかひて名へ

あらし吹ふるやの浦の島崎を渡りしむる有明の日
又繪鳴と云ひてゐる、山のゆきかづきの色は
いくまよ流徳をひくみゆく山と津のあし海のん

次廻のうへまく

をまわし浦里のうへ山紫や竹よの塩やく煙りあらん
きのう船波の行ふくぬす和田所湯と漕ゆす、すみの森と舟うちく後し
こく舟のナ、泥あくくわうなうりさむか生田の森の船風
去四月舟後と上船て九列と度海原の内見、南の海とて、七月廿三日と云
又船波は若ぬ、只ひ色はかきアホミ日の中とど、かみそりといわ
事ある事と、おとろきと

難波江のみちよの色くをうぢる豊あし原とアラキ

比道之記いあーき和とちんの色と類車なるけとほも

さいかく記一付年

○乙下佐軍記
一 豊後の守大友義鎮肥後の國とほんとて天文二年佐伯惟故美將として
作向の歎を合志佐勢守隆重攻一も多よ豊後を守候人森迫島船元がる
三十而親王せよ十七歳清客倭勇よて文武の通と嗜ミ穴セーき若者有

名が船形ある兎整と名麻毛ちる駒オガタリ降くと、皆をガタタ合志グ
家人山岸十郎馬歎と忍び左刀ともぬよあてをもる事、山岸が家人中ニ端て
親王と組て度まつる船をすめを肩と捨、山岸十郎を降と親王が船
上乗に附け二刀とて首とゆる林波、うゑひの不の田、骨とわくセ極ひと
修船者よもあれ合志つらう是と云ふ事の立れよ三年萬能の申ニ金の
絆入を入れ一月の音とぞ書くうづる

余うう名にをか一色御士の臣とぞ御とがくとおもん

修船者と氣し客觀のあらむる御事の体優よみて居者がよしく感し元
嚴とを佐伯の方へ送りしとを度合志を力をひきはばは御奉し
秀吉公在列候代の時相良高内サ浦根原と本領とあし賜りも處人深水休浦
内侍よ五奥セうるひをはめうるよ体甫畏を言ふ十日ハと難有ハゆくを基、相良
後代の徒士まで余程くへ免す有を譲退よカリ色を秀吉公所失有く
海を旅業よのを便利て、一とみひ沿陽とぞ御ふとおもひられ体甫れ敵に

うの様のねうちと爲を才とわざとつらしよといふが如き
多吉公の色う患志とは、感じる。

一文長六年八月中旬鷹草新城湖初行の時株井素丹主者酒の側に有り
首の狂言は

○**階徳太平記**

シテ

一鳴津和ど乞るは傷ナカ列と悉く平均しきりを以て肥後國住人本山左近
入道絶毛よもすう毛ハ一揆の罪を乞ひ色ばを罪讐伐とあつ出一
世者ハ連舟の達者スル者年上路アツマツて於小野社頭一連舟の有り
心うる一き風と云ひまことに云氣々の行う色ば

人ト色波服ダツ むきぶいりとす

と角アツマツ色シロも時の義安の半里村経巴涙眼を感せし色シロ岩田景の経
毛と唱つて無限シムジンと秀吉云々と風邪の者非可シ誅スルを咎ヨガとゆ
さう本山不地アヒ百額の連舟無シまべーを経巴は夜す所をしたる色を

益アツマツヒトケノ直世のねう肺

又深水宋方と云者門目見シテトアラリ色は油を連ふのとあこと写つく聲
仕アヒとさうれ云即景シムジンの獻すと有り色ば

益アツマツヒトケノ直世のねう肺

と侍アヒ色シロ即感有て時腹と賜シテお若シロ天正七年薩摩肥後お張の
時水脛ミナガタと飯シメを支へうり色ハ故政亂アツマツと有りんシムジン時矢文シムジンあると送シテる

秋風アヒかくと落る木の葉シロか

と有り色ば宋方城シロと射く

よせてモ一づも 論シテの月

と伏シテううと見シテと落廣常シロとシテううと和様シロ
と有りは勝シテる

○**階徳太平記**

シテ

一藝列可シテの福王寺と云は一の名石あり是レ清和の御生前シテ千里源の頃石傳傳

物語シテ不載也天正中聖護院道場親王時代シテ不傳傳有之

勤きあきあよあよあよて若のひとそご色石とそくかこつるう節

と詠じほひしらう俗風を硬石と唱へる柳嶋石を温糸スジにて家親・林庭リントウに
監シヤク奉りて不寄附ハシブ也とぞを由來と仰うる家親六七年の時力量底スルは缺る
が監長の後或画判官元信は燈ヒメの上路半時ハーフにて家親大力加スル人の効カツうれを
和ハくよ於て相撲シバと取ハシムしよ丈スルは負フるをかづり家親つくへる是の
あたの力業ハラタクはしふすもして我が力量の名ハメとあせよゆし並ハナレく思ひる
所ハ或時間程ハシメ不失失の貸延ヨギされを豪素の良土被ハサシと地集ハシマツされ云家親
を除ハシマツせば遺遠ハシマツして卒一ハシマツを吾ハシマツ力業ハラタク人ハシマツと時ハシメと之の弱ハシマツと加スルて降ハシマツ
ありきハシマツ時別移ハシマツて傭人ハシマツは傍ハシマツと大ハシマツなる石有ハシマツて見ハシマツと詠ハシマツと難ハシマツ及ハシマツ形象ハシマツ
と云ハシマツこと元西ハシマツ成ハシマツ門牌ハシマツの角ハシマツは大ハシマツなる石有ハシマツて見ハシマツと詠ハシマツと難ハシマツ及ハシマツ形象ハシマツ
家親是ハシマツを何處ハシマツある石ハシマツと有ハシマツん是ハシマツを而ハシマツて降ハシマツ郷里の福王寺ハシマツと
一ハシマツ我内裏ハシマツ監シヤク來ハシマツする石ハシマツと云西ハシマツの人は唱ハシマツへらべハシマツと有ハシマツい傍ハシマツを加スルて降ハシマツ
是ハシマツはいのする石ハシマツと云ハシマツと官ハシマツ色ハシマツハ毛ハシマツ丁ハシマツを修治ハシマツねハシマツよ行ハシマツむる在原及ハシマツ竹山科

の福師ハシマツの觀玉ハシマツと萬りしる里の瀬の石ハシマツと斧ハシマツと家親ハシマツ好ハシマツとあれば名二三
十人ハシマツ力ハシマツと食ハシマツと容易ハシマツと動ハシマツへ事ハシマツとねじいで口ハシマツ力ハシマツとちを胸ハシマツとおひ
小眼ハシマツと狡ハシマツと築ハシマツ地ハシマツと凶ハシマツと惡ハシマツ川ハシマツとあうれと斧ハシマツ開ハシマツと時ハシマツとげ見ハシマツと者
すうる斯ハシマツくの石ハシマツと舟ハシマツと取積ハシマツと築ハシマツ列ハシマツと胸ハシマツと机ハシマツと此石ハシマツと可ハシマツの金龜山福王
寺ハシマツ奇進ハシマツとてづる年ハシマツは天ハシマツの本錦ハシマツの魏ハシマツ立ハシマツの連奇ハシマツ正元ハシマツと喬川春絆ハシマツと
之ハシマツと此奇ハシマツは多佑ハシマツしらうが正元ハシマツ乃ハシマツひく石ハシマツとそと詠ハシマツ入ハシマツする時ハシマツ住持ハシマツ二
人ハシマツを連奇ハシマツの危能ハシマツととく今ハシマツ傍ハシマツを幸ハシマツとそと詠ハシマツ入ハシマツする有り色ハシマツハ正元

サ幕ハシマツの上の 萌葉ハシマツ風ハシマツの時繪ハシマツ

住持ハシマツ雄體ハシマツと青春絆ハシマツ三ハシマツとて百負張ハシマツしと連奇ハシマツの批語ハシマツと有ハシマツ多ハシマツ宿
巴法眼ハシマツの序ハシマツとセうり色ハシマツと緑色ハシマツと赤ハシマツ青ハシマツと名石ハシマツと云ハシマツとゆふうしハシマツ今叶
聲ハシマツと能ハシマツと色ハシマツととせがて秀吉ハシマツの門ハシマツと幸ハシマツしり色ハシマツと殿ハシマツトあれハシマツい
りる由来ハシマツとゆ草ハシマツ有り色ハシマツと紹巴法眼系ハシマツ「修勢ハシマツ」と云ハシマツ著ハシマツ、ハシマツ賀ハシマツ
子ハシマツナ人ハシマツ門ハシマツゆをハシマツり、久ハシマツ後ハシマツ七ハシマツ日のえとぎ、安祥ハシマツとしハシマツしろ、右太脣ハシマツ

系の方行と云ふ人つまりて、今もまだおまかで路を歸る。山科の禪師の親生
あきらめ、其へ、毛山科の宮は、遊幸し水をひそむとて而ちく作らる所は、ある
つあらのてねども、身によき事多き仕事ありと、直ぐにひそむ仕事ありべし。されば、身によき仕事んと
ナシ。之こ怪びて夜のあましませけせきも、ほん、さうは猶大將軍と云ふがう事す。
紀國の里の瀬は有名、いと面おき石まりき、有るあきの後をさりしゆ、至人
のミダリしの前の瀬はまたなしと、海舟の瀬を名す、此石とすれんと空て、附隨寺庵
人をしてあつて居、ふくまと御みをまは石ツイしてうがえるを至れり、是
と非ずあるを、毛山科の宮は、右のむまの三ぢうり人
のもの、吉野を名す者ナシ、其をあらはす、其行

あらゆるいまとかづく文元へなれどもんとしれぬ事れど
とよめりる、千里の濱は車一とび石等、則藝列物等車之不至也。すこしを
左圖より一月見てよき色別車と併せて左方から色門燈至多其種類多く
又かの寺へ差し候べと云

人曾見一神御天皇丙辰ノ天正十六年戊子ニ至テ帝王百九代星宿二千二百三十七年
鉄道の政事ニ本のうつし後を良長の勤ハ松の名也如レ不敬失レ中主と延弘天暦の
至高而榮れセリ多々卑民今ナ及セモ徳と慕ふ爰ニ幕室大政大臣秀吉公モ
才微賤より起り東夷と平ケ西戎とあづク威烈海も周く爲事家之澤久恨
らく多矯詔也し非核亦仕任園白波等々人汚々左政友呼扁闕の制有キ
よ以テ今世ノ月ナ六月聚樂亭へ移幸公しあリ和舟の御舟あり

詠寄杜絳和詩

复曰侍行幸殿省常省。因休焉松径和音

萬代の名のあざれ御をん御本多さおの多油百津

詠寄松龍
和寄

私の手の少しきりかは、庭園の池の傍らの松のあらうき

閩白墨長卷

於大納言源家康

海の松のまゆは君のふとその故に發つてそゝる報

橙井経玄豊長秀政

詔書の御代をとよす松原氏の事とおもひくより

三歳が在席中豊臣秀忠

松の木の義あひを。庭の角よつてかの神を百代や津に
松の木の義あひを。庭の角よつてかの神を百代や津に

松の木の義あひを。庭の角よつてかの神を百代や津に

四十日祭の御道あり今宵院の御所へ門脇人を遣す

主代は又八百石うづとまじても從事するか時ハ皆時

殿下にてかき附りす

云の事の後のもの御へ至り。跡向にレシフ君、露見

主上と旅まち名あらむあり十八日還幸の御催。一章す。御殿下門跡り多

びよえつねくのそげわ有て殿下と供奉しまりて禁中へ入事す。をうそ

後殿下と還御志のう十九日生氣いとも御方あれと相と御禮を打続天降

風あくまじ年元より天津御井の御子と殿下怪ひ居

時と得し玉の光のあらきと御幸ぞりふのゆう人の被

室またと君、内幸とかけとぞひみ縫をまく庭の面う耶

内幸が御足下事凡體つかれを歸そむけに雲の人

もくろ煙つきせん禁中院内所へ坐船舟と進手にまほ三度、萬葉

有毛辯曰

今度奉成行幸、萬葉辱次第絶及二言上事還似于樽矣其上無恙奉遂於還幸之供奉、事甚以致恐既呈微志、卒猶不遑伸之役持、峰腰三重、雖有一改之義甚恐化洞亦合守、御氣色模様宜頤御披露也恐々

謹言

四月廿日

秀吉

尊亭文

勅使音文

中山文

御被備

獻聞之如言

御威門事しかり

玉と夕日とくよつけそ。世はむらくちく光とりへんより。
うきとし隠れる雨とゆりとや晴そつゝもくらくものうへもと
あささりしてうともももやうな経済あらわしあとす

院河釣

うみをし道と西まおなひそまのそりのせすくすりゆき
古人云和奇よ海鹽の音か世の音とまよ上とすむ。内製鑿井殿下の所詠名

麥風辭とおぞれ正雅之辭。豈非乎。治世之著。其

一佐久元助成政ハ信雄々と秀吉々洋相ハジシニの因古信長公の恩と不忘信雄公の仰味

方とめしが實和從有しゆじ仕て甲斐がき義と守りけると。佐久元助中川
モロ一と

郡と五右衛門とを相築肥前守と號り一郡半仕ふとへにきしれは世半
うめしよ雲のとを時と忘れぞ高づ色々と
何事も好う昇るせのゆあらてや雲の白く降らん

と左、本多びと見ひあらじよどうを復秀吉公九列退法し時肥後国とくよ
モロ一と

一天正八年秀吉公小田原の城と攻め八日數とあきとと、いすて唐城とをまつ
精み日と重と止とすばだ野原の火を^{クダ}因^{クダ}を果^{クダ}るまよんへうハ殿下是を
慰^{クダ}さんと姫^{クダ}の母^{クダ}とをさしら金の扇の匂^{クダ}いとりやけとああ泣^{クダ}はま
女房たまやまきおどきやへと宣^{クダ}ひをば声^{クダ}うるわしく鳥と催^{クダ}しるこ
時の咽^{クダ}よ

さんとうく、うちかるかまと、うちうる釜と、ゆうときる、ゆうと
きる、こまくゑことなる

と鶴^{クダ}いしが御金のとくとくとくつねると金とすまうる

一 美吉は東行賀儀の名を額の連号と申仰るが爲め

屏下 銅玉 やくも唐うひく鹿耳

一 秀吉は石垣山に陣すの所お高山郭云二声三声わづき一ツと

鳴りより小糸山の不くちん

一 岩付の城赤條十角氏房を小原と名城せしと岩付は赤色し妻室の件は

葛原三石鳥と云者な文とあらへ小原へ送らせるを文よ

一 葛原門を二日夜の間を憚ゆる事とぞと云ひ
ちくは城の事あむ下さりきと皆いへて、危うく見えいふる夢
因みまさんやと、よしそく母娘と多喜たる景子の事とお
詫し、あらへ林へ云々と押はれをりて、是へて門を要くれば
かく、さればおもな事は、そよしゆいと見ゆる將軍門守方
多喜、おもかくなほうらふ、とくをせよあるやうで、そほが主を罪と聞
あづめゆるのゆかりこれへ、こよのいとみ入をりて、やしあき色

もあはきし、義理を失ひの如き、とかくもあわしまさむる
はあきひはを交渉の父母妻子林門助けられゆくゆんれ、とく
くも葛原ナとれんやく、多喜となりて、とく

六月廿五日

岩付三えたササ將

ある十郎はすくとすくへ

かくされえでどう教えありしとお説のききへと仰ゆる事あき

よほそへ

○後風土記

一 蒲生氏鄉と吉野の主とあつて、吉野有時秀吉云ヤシの事、馬下を駕の
棒子にて駕を門守と蒙りて、二室と號りておもねる氏鄉は以故に
武勇と義友を稱せん所也と一向不思ひする事無く、吉野アリて海を西至る
也我ヒ蒲生梅吉と號ひ奉る秀吉と云ふとくとくと義秀と號ひて
て秀吉を名乗し称め、ハ日半を双の別の者と號せ、海を駕す方至らずと
かのる事と考セテハ氏鄉大よび駕の事す而て義秀像と画一モモト心と

居る今夏小田急源軍難義は及々討死したとの事からて御知報列松坂下志
老臣阿野が追縊係仍々妻女ハ氏卿の乳母ナラノ母ハ下て彼、繪像と廢乳母大
驚き居つゞく若うるよんじ形像と墨し活字氏久打翁ひた寫すの歎美
缺くハ生て再び歸らんり不走し我は反討免也、仰せりよをもづ可む面辨
と知られ、かづく足あしときハ海老をやるて御年々國長の詔をもとし
と云含めて松坂をおりる。老臣後降と自守性秉し日行粧をやがれり
氏卿が先祖像及古色卿より相傳の鰐尾ナマズの兜を下取よおせたるが彼男私用
係て幕ての教令不肖き居所と遠年三度よひひき色を氏卿大は怒り公
用と怪しじ私肩を傷て我あよ云付しるりと遠年大科一人を罰一貫人を
助る事是道くらしもて自らの事とも討すやらきどう是と云て備父大にされ
下取よ至るも捉とまへおじいをとく天下の大小名出幕へ向ひし中は重良と
かくもよび遂の衣料平五貫
家康の人數と氏久が人數計して秀吉の目
付やまゝる多吉宣ひるハ氏久ハ人とねりて活とある。亦兼て仁信厚き

○開八州古戰錄

古戰錄
山中の城攻の時一柳住主守直末知市助^{とちば}討死一弓連吹へ紅色ハ乃良秀吉公食事にて
かゝる是と吐かしおひて油原の珠うむ勢をもひて士と討セテ主事上とお殆
高源一のひきを復活せしは三佐法平幽斎の許より後之の主田邊の城也一如既
の住持も云ふこせくる追憶の所也

卷之三

赤毛の。奥足といひ、後脚の玉をぬける一柳
一小田原の坂と取る。諸陳長陳の玉と見じるが、此處は御陰師の御手。准也哉。
はあさみる年々

星一ツえつせらるる夜一とぎ月を増す五月の室

氏政

雨雲の後、朝日と胸の音と拂ひまくつか船の夕風
我舟を導きよしよおうとすと室うちあらすよぬ色

氏
輝

太閤化ふきと吹風がいといと花の香おみのあら船のうをそぞり
一 萩の鳴渕内小野梅渕守ゆうすやまーゆうし身安とねむりしが造すが瀬瀬川宋
女正は嫁に来せむ西麗在陣のわざかの事あこうとくひの程といそくわくわ
くし御船とことづてまづくよ難めぬ高と舟破損し若も惜多の浦へあると
渕又捨ひ工折しごとく舟と荷縄などとげくくわくわく文運^{フバコ}りう剛和の
更替へんじや更替該取て秀吉公、千かぞ御焼ゆくとせの文をいと萬^{ハナ}

ほの船と御ひきもんをひく、あるまなくうめみどりのうらやま
うのひとと、かと金をかうるのきんとかりとも、困まびへり行姿被のあ、床

き海松が心ときのほる。胸の溜嘆をうつて涙のぬれま、しつと涙の轟
の音の渦や涙徑と恨つしきどがし。うちあらへ御所をもひり、そこ
かと身せぬる業の事すけよれちきこむる。涙徑のうへあはし坐すて
草毛涙の音、さきゆくとけんとくめんと、そのの種のいののキ一もけ
まわひゆまく、跡ゆくひそむる草の音も涙の海とぞ。

物水の心をうへらうといたむを心ひめんとあひふれ
とよみおく和音の古事記などと、氣持のよきまゝ、今が平西一をうす
すこ一筆なくさみゆ、思へばへそひもくを身前と有つてよ、大意のむじひえ
わからぬるも、淺るしゆづる我心也、とも思へどよりはよどりを心うへて、
て、又高き思ひあくを、因のけと有れよ人とのひらし、我と又心の四つめを
生をきり、梓心を身にせしむるかせば、身の仕はなるべきねうるが、ゆきば心の修ま
む事の如きとこそ三の色、源の心を手のまほと、古き文は多くそしらべりと
も差ぬ、いうちる紳の鑑へゆきを失、浅とうちる聲と聲のみん、或人跡を失

ひらするの有りと、いやそれともう一事をもゆきて重きの捨てしと諫
つる車を有しげ、かく秋水のすらうれしに、そもとぞうして、あらうき車と
ゆき車のがまと、坐の字なきとこそ、又いかしめまくら、ゆどひの傳せざらん
と、わあきらうぢて差へゆつみ、ほんれ神の門裏にまよ車を約束し、
是より後も參せしとぞ、祈主がべき、おもう今すたしやで、こまより
こしとすん、済うだ、既うなきあゆと隔てあまの夜のびりとくへや、もあと
ゆへた、ゆきのとくとも、又むべうござらんや、天平十八年の秋々集のま、
こまのまく陳すべきを作有一聲、すふは室とぞ見へゆくと、多くの日
をゑるしがのるをもん文、律初の年三月もと爲つて、あもと、こま
の國、船生一泊す、何方ひととくのようちづけ、大うの夜、とすら
えじとぞ東の草木がりととの語りばく、船のあらのま、お吸ひのた
よめて別とゑく鳥の声く、おあそびーうも

おもがとぞゆきらゆきも居らぬうちさらの夜の聲をもゆく

とらむおく和歌のとく、是故絶多とくう城を、う跡し盡るひと、城は被
さうかよめらへあれく、恨てきよみ、よみをひき、餘かテを詠らくしゆくぬ
あゆゆつゆきもや人のよへほん義とあゆもさうもくよーと
と小町がよみしよれもとづく車ぞ

附とぞ別とぞれかしゆよい、油不レキを命取す哉

諫もあゆき命かくと、うるをひと済う差へゆけた今こまもし、と
一のゆきゆきもくらしゆとぞなはて、あくある事のきのほど、長ゆきとれを
れむゆきとぞなはて、何事も一言とあがしめし生となり、がくくゆるる
きよれまきい、わくと、こよかうおヨー玉ゆくと、あたうしき生にねう、ひと
うきとぞ後、わうこのおよつけおヨー玉ゆくと、仲家一の宿、と
かく、解ゆく目と解ゆくをゆく、滅ゆあやる國の門、津き冬の瀬とちうり

かくあらんが殊ぶ知とこのまつれ我こうもとせす、かここん

是をもがくかひよりよて相見しまし、ゆちがへくこそゆ一月を

五月廿日

菊

七川のまゝ後

月

秀吉は是と門後にて憐み事をすうと櫻川家女と油野せら色よりはせりけりの御名護屋を參上して懐り多くあきしまをたとて神の御舟とながむことある

おこれあるとてじむ天津神のゆよかちす君の西一さ

則引ゆ物一物をゆつゝ見る事人秀吉の情を深きとうんじあつたを
一説は豊臣公細錆征伐の時造る氏の臣源家女云者新島の別と指す侍を
を役づく事想慕ふて事とあそて情とのよ達せばて反そ人の心は衰弱
せらるる事よりて公不快へる公ととめりきみく家女とて事すら一いまで太袴
つまびらし御をよろ公のなれ不仁の事は少くとども又蓋シ不育アヒが多
支の死カツ忠チカラとて一女の生ナシ哀マサニやまくもせざ厚年タヂハ也既ハシマるモ君と
軍中ムクシを家と云々べし宣ハシマ一具婦の為メテ甲カミひど帰カムる千載チヤウ
笑と遺ハシマを者と謂ハシマし

一文禄二年甲午二月廿日秀吉吉野の先後有ハシマて大歎と立等を終ふ供奉

のくと萬葉集としあ至りきハシマの入那集ハシマ正七百紙列六百の稿と折り市の坂
又至て上らを後ハシマ新宅有ハシマ大和中納言秀俊卿を建させハシマる御茶屋主とゆ。中や
せ色と則立ハシマをほとね千本の桜、花園、のこのひ、うぐれびの松など門後有ハシマて
秀吉公からぞ諒ハシマド活ハシマ

吉野山根のそれゑハシマおとらえをハシマるの 春の明やの

又屏風の草の草ハシマく

芦ハシマ脚ハシマこれハシマむとをかき色ハシマる。之音と花の陰ハシマす

三位活ハシマ下ハシマ音

御吉林や元を渾寧と改慶ハシマあひとなつまハシマあとの下ハシマ

かく姫母と云ハシマて若免絆ハシマあつく御ハシマせし吉水ハシマ娘ハシマと義館ハシマし兩日

内添ハシマす

一文禄二年大坂卒ハシマ於由己法橋ハシマ傍ハシマ列の人刺作ハシマの謡芳野花見ハシマ高鶴翁傷

明智 築の 藩 比立義金基八角は仕事と云はばしりと秀吉公が作成したる
一日を秀吉公休見と門城を守らむを所仕方折休見の先地ハ宇治川の傍に
流色忌船の便より北を洛外を渡て左家軒と並へいと源の東ハ町を添
むつ川流れより古河よ

ひつ河の端は生てはまきを猶故うを花のうちめぢりあれ

至外名勝の地かどく三室戸と云山の隣は三千寺に禮れとうる祝

産あらび礼音ともあらう

夜とすゆと月と夜とむらと吹けはうの川漱よ五六浪

又門智は詔うて月宮のゆと西行

伏ーと見ハキの観イカと仰こく夏月の都の秋ヒと代シテ

かのとくもくの几多と云也遊の方角多々と云城下よおほし定らる

毛あさひべらくひや

一 鶴鶴を生むる高塙田大谷三奉行の行狀とるよ三國六位智ヨーモ

智筋は以ちよとて或巡よ於て多岐雄異のと云秀吉公これと知事一とひて
如義を以手と足海の場田長盛を天性應為者ありされれ朝向る左我見東
膳色走廻りとて逃亡せんきは惜きと云年生が寧へ著は令をらくこれ故
はゆゑ往來と云持為のえがるか日ひの不思忽チ変じてと自らも思ふて
介へかしとてを付よ至てを我いよ引んと云たるのひと故の方へ引向くがし段
程よ引んと云べきを兩耳も頭等へ無ニ無ニ引立改のまゆく連レモ
そりととちくあしる程のをしだれは其の志ハ以し多きと云病よあま
色是ひと身の運を中身の下せうされば人と智と義ととのどく偏らうと
タゞ終満足の薦不非色を前程但馬ると云付う大谷吉継も智筋の茶色
ありれど右筆をひかず立身して今三奉行の列へと初ハ朱茎と云るとも
一文禄四年七月十日閏白秀次公高野山よ於て門生喜の時一筋以筋を贈し
定めを裏めとて門文林沙話し並び御降服よりさうじと爲き以水とあらざ
作せされしと用意やあらんふとあるをより門ねはの角と金を下す

即佛は心にまあるる爲ひを思へてあらねばとの由事は放滿
をは遊歩中りんやとす下レシモ想ひ我よりう簡席の廳す御ゆう付ヨシテ
山幸と殿助十八歳國吉の御服持と給下しゆがに戴仕といふやもくもの服ば
あみ左、引出しとちやと言工し色を首毛を筋毛う二萬山三十命生國橘列
三木十八年
着着の御宿持と御身し腰十文字マサニかき切と首とくと三萬不破万作生國橘列
又毎日詰し立辨すまづら應つゝ半不孝色をも忠義なきをのり一
有根の志のき藤井君を心地腹とぞし毛と仰ゆうケリ四萬隆西臺星と秀
次云多のよそじるべきは空アモリを真加マタカくありしあせとす上り色大漁子を多
及べり五番秀次公生年廿八歳正室の服元と仰す即自害と逃げて神
門に則毛身と物假せし重次とひて快く自害マハ也哉弘安ナニラヨギ内腰ナカヒとよりて内从踏ナカハシいと神
門毛と姓信を倫ブリと難色を嘗シテ毛類と終せしが前後の裁判ハセガワ至く名臣世の説と
まなう毛と相手秀次公同罪とちれて切腹の面マスク木村若隣マツリ并列大門寺

主切腹公白江備後守ミヤコ田中貞安寺と切腹と内毒マヌケ通陽マツヨウと自害マハし

ク一首からうん

主切腹公白江備後守ミヤコ田中貞安寺と切腹と内毒マヌケ通陽マツヨウと自害マハし

主切腹公白江備後守ミヤコ田中貞安寺と切腹と内毒マヌケ通陽マツヨウと自害マハし

主切腹公白江備後守ミヤコ田中貞安寺と切腹と内毒マヌケ通陽マツヨウと自害マハし

秀次公落毛マヒナひひりしを長盛三成マツメイと業マサニとひいそよしる年マツシタたゞ
も院の門所留マツシタ七日といひておどすよ危得マツシタの門をうりりと車マツシタの介マツシタを藏マツシタ
邊マツシタの門マツシタとこもほくすよ殺生禁マツシタの殿マツシタ山マツシタ押入マツシタ庫マツシタ房マツシタとなく改めマツシタる
事マツシタし

院の門所留マツシタの門マツシタの介マツシタの將マツシタかれも毛とちつマツシタすとちつマツシタすと
毛と

因マツシタ有二索酒マツシタとて表吹マツシタの一臺門若君マツシタ若君マツシタを外御マツシタ毛の女マツシタ達マツシタす
至マツシタ返マツシタ往マツシタ害マツシタあらべマツシタと追マツシタの店マツシタへ毛マツシタあつてとマツシタと高マツシタと急マツシタきつる毛マツシタ長

表マツシタれマツシタの誤マツシタれマツシタの者マツシタれマツシタト時マツシタつうて引マツシタ立車マツシタ一西マツシタトニテ自マツシタのセマツシタある若

居場所の事はまことに此義と云ひぬ者となく見えぬの其様を嘗て泣かし志ハシの
事も少く少く無事に車の時を経ゆる。主犯も亦可らず。昨日ハ引取リ
御船と深く交際せば母娘の膝の上にさき泣けしは何事となく抱宣ひといふ
ありを。此上りんも是へ仰びて三條河原を差しめ。車ノあらしより一の墓トサ
東亭右衛門の息子を也と仰し。其子を殺して之を三十四年今度申謀
又の沙汰あり。向こうより坂田翁がさへもしくいをねる。是事は是事とぞ
おほしてやう。

之子也。不以爲恨。而如是者。則豈外於子也。

卷之十三第一舉止學

右より移害せりきを取る事アリテ右方傷口も墨ツツ
右の傷ともやらウシテ只の極り後も其しも傷しも無キ一毫ナシシテ右それ
一も其移害左刃取れ無けたゞとことく害一も其移害上も思クレ

手本过了ふ何者の仕業かんむり書て立多八

天下ハ天下之天下也。家の罪は罪を負ひて、
天下の罪は天下を負ひて、平人の妻子杯の咎は今日も狼藉甚ひ自盡也。以求
用あつりがま改過不非也。而く因果の報應なり。と書てモ特端ナヨタシ

世の才も不昧固景の小車也よ——あ——めぐらむてぬ
野客叢書小魏永平の元翰が妻李氏と謀叛とて崔光奏して曰乞愬が妻懷姪氏
誠の胎と計り集討の主事奉を以て陛下春秋日長しきとて備居あつて皇子襁褓
未央は至る是が爲李氏が獄とゆべて育孕と候ふと帝欣然詔之曰
汝が是産と心し子有胎と教せと考る丈銳き強忍の性とて汝不殺欲と
汝生て是と同じべからざりかくす也一二び是も悟と呼て玉乞が汝はとみずく
刑獄と怨む汝の人准へば心ありん情を機と勤シし仁多と挽回セバヤくや
あきの子とつて汝より是左司の候封基——かたや直に罪を失と爲ひて後を
毛服三十六人ニ至る陽泉をもて戮を一む刑の歸女に居のを船河さん年と號を
ゆしこれはれぞくへと改て姓ひ生——あくとて明——とて後歎墨うるべきと一旦
の念と夢が半身のこだん或ハ又故人子与、あるものありて保護せん年は高きをいふ
とあれ崔光が所課集討がつとつとやらもの也又行の時大抵そぞれ先の急きの妙色
と某町の春暉、いづかことりそく伏するが暮那よりびをもて町の老少男女といひば
名斬罪は妙セラモ一毛東涯の蓋簪拂ふるをと傳る臣のまゝ傳色ハ忽チ
坐身まく坐ひ早免冠國の梅若丸子学士御なく我意す但をそひハ勿シ
されど是の事より冷ざるを翻ひ廟舎と終事奏ぬ事は因——ときも天理也

一天正の事、豈太閤所、瀬戸と鹿猿張して百姓の刀脇差と停止せらるシハ一揆と戒むるのやねうそを條書の中より略する農具とやら耕作と專よりしなせばふ歸おのづく長久くべき事とのやうをさう。

一志津が島合郡の本牧石門無助と福鷦而前と口漏し船と利通ひと作ヒーと社子有一西ノ畠の軍事家と度て功名と遂ヒテ、伏木ハモレトアリ事とと押止ク色ハ石川西ノ畠ホシの事ととゆあがまる市松竹とこよき法服と向かひ明日吉後御と尼ヨウトテ後をあらう妻は柳カツラ浦と飯て唯一人ままでけ討元一人とモ秀吉ハいシケ色大を恐れ共戒とすべーと云あつテ秀吉石川タケミが育の長ねよ感狀と与へらき至文二年今友三七殿依違戰スル軍アーネ莫添大臣之如紫田修理亮勝が出現レ押波、欲遂一戰スル之時兄無助先趣、金鑑キンカク、金撃死、拔郡之擾於眼アシ見之、尔雖為善、寧無一念兵助之仕志、与秋千石、白後弥ハタケミ、抽忠多ハタケミ、正十一月廿育音石川長松殿秀吉と云々をも

一志津の軍船をて佐久ると皆捕來、秀吉見テ海を出當遲シテ若小助て

事と与ゆ、しニ心アラカルムんやと間は監政冷落スル老英國と獨りハ海とす捕櫛ハタケん事、今日吉身の上の如くさん新ハタケく不恩ハタケとあるたは第ハタケとあんやと云相承スル事とナリて大致紅裏廢袖の下袖白惟子マサコと室マツコと云れらきよ一生の歴ハタケ年風流ハタケとモトトシの室マツコと云秀吉ハタケを何モう色一ハタケ大不恵ハタケて毛ハタケとあらう云蕃内ハタケニ十七軍皆人ハタケヒトツづ

一竊ちて後を陽伊翁ヨウイ久義安ヒサシキ六命宣政是方紀列ハタケのうき松川源作と語ハ河内高城タカヒロ守傳ハタケ後又南河内天野山の岡ハタケと受害ハタケて、故に軍アーネ一連ハタケが遂す矣吉子攻滅ハタケさし後小原ハタケ入北卒亡て元資金次ハタケの種名寺ハタケモキ秀吉ハタケ傳ハタケ、宇伯父勝家ハタケの弟ハタケと云、志誠ハタケは大丈ハタケと云、安政一百五十五石宣政ハタケ一百石ハタケ、そ菊生氏ハタケ家附ハタケる名君氏ハタケ廟ハタケモ一體ハタケしきの財蹟ハタケさくらと人の多ひハタケ、ハ氏ハタケ内ハタケの事ハタケなく海ハタケおざきハタケと被ハタケすくさく。身ハタケよ元資ハタケは零ハタケきの士ハタケやうするものと云々をさう

一秀吉ハタケ、主馬隊の時千貫ハタケ米食ハタケと觀らきハタケ、よまと馬ハタケのちく運ハタケ、と云ふ

紅の盃と紅扇は絶する者行ひ何者をと聞キよ 德川家の士威隊小吉ことすれ
裸をいまと聞きよ 東照宮二千石をへ室すと作らしよ 無きあると色種は
奉らむを五万石与候べと云ひ一六千石 東照宮威隊と至る所シの事
き手書はりんやと作あきば御用事と云ひて御前を仰せま事すとす
海衆主と奉ふそは吾為すとあつりんと作ら色一才取不候と施し不肖の身障と
食つて是もと争うん者と思ふると妙ぞうとも思ふは只と自害一と
とあらんぬとトヤカセば金田と秀吉は門内宿ありう候よ 東照宮長臣豊多
をとす、よ少一三尺の鍔を持へばとちし人のぬ臥ミとあらと作ら色づく小吉
正成後隼人正と云一人也

一秀吉伏見を或日廻間よ出らましは五膳の刀と又そそきもとまき一
ゆ一と遼ハぞうり色は薦由吉以拂は神船のかとしゆと驚きそり色ハ秀吉が
ひく何のよ田とおき事よ秀家ハ更羅とぬひがよ黃金と鑄うる刀もゆ
べし京勝ハ之の附長剣とおり寸の近す刀ととすてすき利盡ハ又ちひとし

時も先陣後陣の武功すう全ノ大功と仰され大勞と忘れ草毛の柄の刀危地
非毛と思うる御先主是風とゆむ是野の鉢は傍りあむ刀とくん 沢大納
志ハ大富よーと一劍と情をなへし縁ひる事すとく又更羅と清キ刀を志
よ可いゝうととくと豪しるる遼ハそりうとあれそー 望牛頭と云

東照宮の所事

一秀吉武時給也よ空ひ吾發向也ん海賊句セモ

奥山よおもてみくなく意とせらき一六紹色つま

志かとし見えぬ事一太の鉢

給也當ハ弓矢をひつてやん秀吉坐て聲不声すと吾らせんとせば當がども
有がどりとひそ一時細め井井かく

武能行やとのとつてくとあわよ草毛行の事の那一

とよううあのいと色れを多き既ひもうけは當のああうとせゆに非ひ
あ陽東へおほのいとむかひのうるをうかがひは一とえ年

上り御別色し手相
中正慶陽子長翁行りと云ふ

豊臣の奇と人の志うむる
その中よりと致す如く人

一
天正十六年八月十五日於穀樂亭一和齋
詠八月十五夜トイハナラ 和齋

卷之二

校大納言家康

る人の心のこもったうらやまの月夜 駒子 朝邑

不思議と見えやまぬから、さうすあまは秋の来れ月

かの日も秋の夜から少し、霞ゆく山の雲をあつまや

卷之三

日ふ代の ましてか秋の月 実色くの まちをみる

な世情せ蔵忠無

大方れを世人のあらまへに育の月のよきとて名すまき、

侍從秀一

和の月を一月はまつて物名とする帆のあれを

法從隆景

法色代とと作けたまれ今音船とぞよつけと

法從慶象

主一されみさくやを東方北月のさくと終焉

惠慶辨

中秋立秋長唐佑和旁共俊良一統乾坤君与月無人不道借風光

法乍玄旨

月音ねの山毛 岸^今音^古きく 姉捨との新とお上ばし

法車会以

辛子ニモ墨もといと 今音とと思ふと月のまちをうとう

法橋紹巴

秋か八三ちのく山は怪事と云ひ称あげて。左の月新

法橋昌化

今音移すうちうすよもひりワードのと山の新とぞまこと

法殊由巳

秋毎の今音あづと下づとあと移し月となるう耶

右のが松久郎の御^内名とも思つ

一夏長^{アキナガ}をひ高西露陳^{カシタマ}をゆりし林中^{カミノシタ}。教^{ハセ}本綿^{ヒメイ}と無^ムとちし纏^{ハシマ}を卒作^{ハシマツサ}。又表裏^{アラタナフ}にし中^{ハシマ}と入^{ハシマ}て布^{ハシマ}と名^{ハシマ}と名^{ハシマ}をしとく今と園^{ハシマ}京^{ハシマ}を改^{ハシマ}修^{ハシマ}布^{ハシマ}ると申^{ハシマ}とう

一季長^{アキナガ}を表^{アラタナフ}天明院^{アマミンケン}は我^ハ其國^{アシカニ}心腹^{ハシマ}の能^{ハシマ}也^{ハシマ}と百姓^{ハシマ}よやう^{ハシマ}し

ひもるに承旨。儀をもひるが方世の祝言と相生のむらをめぐらすをもて御と服能
みそせらるて種の人たあこの奥美と渴しき色えのま残身は無ども笑勤懃く
有能能。今年の象とひき殿下と対坐と首をひきよ例の長松を又地調の後す
うがて御言ると殿下吉訓。御心へきをもんじとおき頭と振くをほんば足
臨の音の音の外ともかく醫一は扇にてうその月。な様の池とあ付
て信長公の様とはづせりと思ひて御の様の君よあつととての那集の
傷俗能。こそゆて御とおきとおもふとおもひて御の様の様よ似むると笑ふともかく不
信。年は堪能するときとおもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひて思ひておもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

一文禄二年八月廿日秀頼誕生の弟が安産成就の御祈禱より被昇よして
連喜の御會り。その内紹也の發向ト

大般若ちくみ女の祈禱うべ

一二三。五く。産の母とく

いとある顔もござる。若君誕生有ること不易候なき

一利久多原の湯とねそそぎ有天十八年秀吉南征す。忍辱はあらう。山
陰の通す女房の下駄は割草もせし。の葉と、求む聲よあく。しの葉の
差稱と見え或本作は思ひておもつて。年かく、英驥めうしきハ阿波の者と同をす
利久やまもとおもが勝手に丈よあきよ。の歎うよがくと。多喜の常すほびて仍て
して強ておもが勝手に丈よあきよ。の歎うよがくと。多喜の常すほびて
利久も此輩はもおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと
候て。秀吉利久とおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと
を天あと路よとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと
利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を
湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を
湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を湯せら西利久を

一豊太閤の臣官田志人と武富朝一の人物。或曰左圓轉。或曰右圓轉。或曰左方と
今よりと。猪人。名の後。豈云三倍五倍と太閤欲て曰十倍。左人と行中

事は皆仰て云ひ乍る萬葉芳色りと左閻紳をと何とぞかく云ひてと宣ふ拂伊曰寧固
姫人傳立ゑへ死してどうせ其事甚芳色りと太閤歎息して諷ほ汝う云アナリとの事多

雪風曰若輔ハ西蕃に住ム陽器ニモ有ハ居ルト惟トニシニシカシテ賓主
の往とつも十倍其處と多くひそかに候燒子投毛仕事の士輔丈より事と
云(あづ)て需一ミ食也のすもちとぢき人ぞう耀つれハ一物とくくと人の施
とくとく皆も人びととあうて金錢糸布(カツカキ)じむ小物の有る者多とある。
事なし燒子がくふむじぬ屋とつまのうこはまを飯と炊き又湯と見うて茶
と喫(キツ)す湯の沸時ハ彷彿(カツカキ)松濤声者日高遠幽邃(カツカキ)詠と吟(カツカキ)一喝

三

あいをうよあひのやくとあそを金と雇はねーを打碎モアレモアレ
阿ハジマサの鉄活师とつがやまつう利休とあきれてひそんぢれくを同の趣意
すあらしきモバハヤドリんとあひがくとあらむとせうとせれも有の儀モヤクヌガアモ
由来あよこの差脚をまの送りこみきうとるどなーき我シガヨモとあわせ
至ひ伊勢所定の津に取後と云名前れ鷹羽师ちりと序ー之利休モ士ガモーおも
テテトモモーハ若脚よりの破りうつてのひと端ヒ一ツノ脚ねとちる差脚破モアレ
後モ金葉園の良恩寺を收ち色々墨署

かの左圖の所ね多度大重の候の所象は傳へとど又細川玄蕃源氏とは金とうつをと所野敏
後は仰にうきよしの所和の足をもとあらニ傳テ筆は傳へハ又身し形は傳ひんすハ怪う
ありと等一色ハ理也とぞざ色等とトナリキさくバヨシと全金子萬付よこれにし
ゆのちく多作極しと作一筆もやを傳て多くモリヒキモダ之奇多し

の傍らに一季吉公達の著昌利の香匂

此後之年月
未可考

秀古

沙翁
桂子山房

萬古利

佛塔師連丈曰人情と叶ハモトとちくまとうしはざれハシムヒトシ
ごき佛力の入る事

初松魚家蟹もとまつも

そのハ三往中將の宿野町より一とてくまを

すゑをあそぶやとのへやう
多聞院ちれりト日

天正十三年夏六月、秀吉は松ヶ崎の城と西方面の軍勢にて攻め、毛利主
潤川三郎左衛門が置大船を密く詰めては公近宮守本海新四郎と云者、潤川主使の
城守義重（ゆきしげ）が裏切る發車をせざりとて居た。何者かよきん
城中より走る者、二つある。蟹と風と木海新四郎

右是古人合鄧和方之書

秀吉長野を率て金加賀を守る。金助と云ふ者を従つて金助の家に至れり。一
月をもとて既に次元を舍て守る。是の間、西松ヶ瀬にて作らるゝ金助院へ
祈禱し、より某の金助院の御守と申す。小倭院へ
足利が家敬へまへし御事不可。某が御守と申す。金助院の御守と申す。小倭院へ
放火し神社とお破りし事あり。是もさう者。後雖と忠色ある。是と忘色
見の御守と申す。と申す。某の御守と申す。と申す。と新うるされ金助定
業や極くも死去せり。即ち也と申す。大を憤り小倭院へ死ぬ時の声と云
作り。奇是助之坐見の故。小倭院を攻むと罵り大と放。一矢と放し斧と以て社壇
を破。其の後、休院を碎き斧を以て勝利と申す。其の後、秀吉は健と稱へて一矢を有
ること聞こえ。是かられて是助之坐つとも忍びて秀吉は健と稱へて一矢を有
ゆる。又豈か心と有る。や生重修堂の

うさんと古時友井あらかづきて清見淳の奇のゆゑと云様門家をあそび
能くわざとぞほゞやうる船船にてあへまおみの道もがく難生さる會
香炉の木立かゝる車もや清見淳の神の心ときいづきの草もとと色ハ友井古井

清見源^{スケミツ}と云ふ者、波の上日^{ヒマツ}の御代り、渡千鳥^{ミタチ}。

真作記

一時へをもて世をもと今き陪臣の聲益微し、重吉砲砲^{ボウボウ}、荒見の時^ハ諸大名の刀持玄関の
手もあつ核目の人刀持とあらば、よひをあまく、利家^{リカ}の從者戸田鉄後^{トダテイゴ}を討^{ハシメテ}、
庵從^{アシテ}をしきぐる、居せる左足痙攣^{シビレ}て迷^{ハシメ}、不^{ハシメ}立^{ハシメ}、左角^{シラカツ}あらわと何者^{ハシメ}を不放^{ハシメ}、お
すをハ打擲^{ハシメ}せよと云^{ハシメ}戸田大玉^{トダヒロタケ}を撃^{ハシメ}、士^キキナ^{ハシメ}下^{ハシメ}なし、眼^{メガネ}をゆる^{ハシメ}、脇^{カツ}をそへま
理有^{ハシメ}身^{ハシメ}と烈^{ハシメ}火^{ハシメ}と碎^{ハシメ}う^{ハシメ}木^{ハシメ}木^{ハシメ}と立^{ハシメ}さらじおうさん^{ハシメ}、ハサウエ^{ハシメ}刀^{ハシメ}の脇^{カツ}、
ありとぞ抱^{ハシメ}とよき^{ハシメ}と多切^{ハシメ}る丸^{ハシメ}毛^{ハシメ}連^{ハシメ}核目^{ハシメ}以下^{ハシメ}色^{ハシメ}とあらさん^{ハシメ}、勤擾^{ハシメ}利家^{リカ}、
何事^{ハシメ}が走^{ハシメ}を走^{ハシメ}から^{ハシメ}れハ裏^{ハシメ}と刀^{ハシメ}と而てあだて^{ハシメ}利家^{リカ}と証^{ハシメ}えま^{ハシメ}しむ

秀吉が彼に准じて間近ハ倭が鹿嶋也を攻め立つとそれより秀吉は復て

一時人籠落^{シテ}とすと間近^ノ白秀吉公を遁^スして天下をもよもよ入る事ハ

また云秀吉公を一時の船^ハ即^ハりとさき^スと大坂に留馬の場を大坂に布

わ東の尉と信長公の味方^トか^レと回遁^シし信長公大坂が尉^ヲも^シきく又

之と度^シか^レむのうしもんせん船^ハ船^ハべ^トのほ^ト秀吉^{アリ}とあざら^シてどと^シと

許^容を^シし^シと秀吉^ハ宿^不泊^{アリ}も^リとおひと^トうび^トとま^シのま^トよ心^え

か^レ事^{アリ}秋^ノ人質^ヲ爲^ス爲^ス急^キ退^キよ^ト大坂^ハ身^ヲも^すき^ト大坂

ハ別^ハう^トと^シと^シと^シハ^トの^ク人質^のと^く船^持と^持秀吉公

のふ^リよ^シし^シち^テを^モ也^レ退^キう^ト是^ハ後^ハ故^事方^のう^トひ^シと^シも^シと^シ作^ミ

信^ヒし^シ。一^トと^きく已^ハ人^ヲ使^フる^シな^ビけ^トの^信と^シド^トそ^シ俄^タち^る因^ヨ

一^合合^ハらん^ドう^づく人質^とめ^シ車^ハぬ^クと^シ引^シか^ク仁^義た^よ行^フし

人^もる^アよ天下^をも^やう^ト入^ト後^ハ不^好徳^を遁^シま^シか^レし車^ハ凡^ハそ^ト

聖^人と^人心^惟危^レとの^互ひ^一か^ト

一秀吉云遁の記

道^ト知^ル事^{アリ}天下^を平^メて^シは^シの^シと^もこ^ト且^ハ凡^ハ信^のの^一も^シよ^リ
も^シよ^リ得^シと^れる^シと^シ玄宗^ヒと^初見^シ堺^ノ津^トとか^レさ^シと^シひ^シは
て^シ玄宗^ノ序^{アリ}と^書ひ^シ船^ハの^シと^シひ^シう^トあ^シた^シ後^ハ悟^ル御^ハれ^シ是^ハ故^シ
聖^人と^人心^惟危^レとの^互ひ^一か^ト

一秀吉云遁の記

東夷征伐の^シと^シ十八年三月の初^ト都^ハ立^ト御^ハ河内源氏見^シ寺^モ、
又^シ彼^ハの^シ用^シ言^ハる^シと^シ終^ハ三保の^シ田^モの^シ浦^ノ月^{アリ}士^の船^ハの^シ服^ハの^シ帆^ハ誠^モ
モ^シ無^シ濟^シば^シ底^山の^シみ^シが^シれ^シ船^ハの^シと^シひ^シう^トあ^シくれ^シと^シ書^シも^シ事^ハ
五六日^モとう^シ東^ノ東^ヒと^シ平^ゲ陰^ヒ奥^ヒと^シう^ト心^ハゆ^シ西^ヒと^シ飯^ハ食^シと^シ一^ト日^モ
八月^モた^シ御^ハ又^シ彼^モ志^ハり^シは^シあ^シの大^シ輝^シ長^老禪^利の^シ正^モと^シ謂^ハ凡^俗
と^シ通^シき^シあ^シ感^トて^シ萬^葉の^シ文^モ古^カづ^シ語^ラん^シせ^シる^シ船^ハの^シし^花
梢^カと^シ深^く紅葉^シて^シ彼^ハ箇^ノ處^トな^カー^シの^シ舟^ハど^シひ^シある^シ一^ト日^モ

唐見寺れどよそつるあれ又第幾とれく、至る一より

又の浦の時空

名所、ちと回る浦沿を西へとあるうる翁士のあを

のも危の多き事はけ遠くよりし

一文禄三年秀吉公名後だ御軍陣の卯月廿八日の事ひよ此御作成く作成
たるや、於て此處營をひよと御御よと此御のまづとされつ
各主ヒ慮のゆゆと想ひて長隊の先と補ひて、即ち主と補
惟と之をものシの事ひよ此御と此御と此御と此御と此御と此御と此御と
されつと有一ハ所高人よ此御と此御と此御と此御と此御と此御と此御と此御と

一長島三宿路平玄旨少當原陣の附言よりよる所

門役セし神すとめくれ老の波移る日日とよ川の浦

法平に陳和モア川の上うち山の岩立つりきハねねり時々と海せらきしめぐらし

一小山彈正秀綱の家督當節政種ハ小峰與一味と城下に築くる小田原義居

の後秀吉云、隊奉とア入りきと御客かく穿浴あらし、蒲生氏郷令
津へ入船は後毛石と等と等と相持し奥列中山の敵とすらせらるは御主事と政種
小山宣竹の旗幕を氏郷、お徳き、蒲生家今とぞ翔鷹と松皮蓑と紋
ありとこれ、三段のたこと用ひらる或ハ氏郷押左衛門は御家事と
名を乞ひ、色と用ひ年と云ひて御と云ひて御と云ひて御と云ひて御と云ひて御と
記せらる。は後御仲にあらば西へく往古の制法と云ひて是もと云ひ
萬代耕岡井兼載といふ連寄卿河に住政種の板は後と付く少山、ありしが
小峰或は酒毎を兼じ答とひて兼載が頭と拘て

萬載つづり、其風ぞふく

トナリ一以百者をハああ年年の本表ぢうとを近親し修うるが畢てそは

裏仰す

一 勝手公東西を貰ふの時武列岩佐の御止痛の日本薬の實
歎きを萩ノ枝よりはひくん花の空と捨

ひめ

齡年を秋う枝うやゆううん花の聲と捨——故路

一第向秀吉公を正すよして秋邦の人民よりは爲害者一からずが如くア人無は
鬼神の心より思ひてどうぞまごとのお仕事の手を下さけむ非ざむとくに寛在ち度にし
て天のゆゑも人主の慈量のよきとて天下のづら解一くるとくん漢の名祖の箕
岳と罵色ひさんと怨色のふくさんと氣乞の人トスベキビ大度の人主小
第は唐や奈良象園鷦鷯の事の如く雖不暇を天下れ至る事よーて天下の至罰以
制し後方祖キ承認通情費が折ハ仁政を助る人多サリキモア万18年の宗
廟とまゝ主計のき秀吉を自立の妙謀のよーて豈間の送ヒテ至りまつとも
一世モレヒセビ後モトテアシ

細川忠興湯草一巻そよがくあると父の忠利に告る者有り色も出来て忠興の長臣
として古事記二首書てよへし

四
二

はるの山と見ゆ

まことのものと能を愈せよとお爲なつて教訓せらるる
この物の心と能を愈せよとお爲なつて教訓せらるる
事の心の方を古今集十人あつた
まことの心を 説教集傳寫法解の事

御多幸候御作の事

一 諸々を御奉公後乃ハ猶と云士卒不致する事の上トの怪と云ひと申すを
うそりと申ハト。恨る者か奉行の詮者と為とお者と詮者と申てと申アリ
を爲めと自らかと云は事と申し吾力をかの若々居れど也と申す事に叶
うむと云ハトと云ハセと申ひセラ。又或時主者押ニ旅をし候也と云
ウラ色もが秀政自ら旅と自ら試ミ極モ吾らの肝のより立在りんと申よ
リ。主それぞ旗流せられざりき事は居人久を御と云ひハカクトと申す心と申
ハキト御ニシモシ人ひあつた。當原陣中ニ幸セラ。年三十八歳ト云
一 畠田長政のゆみ酒徳をと写摹あひ移志の役有母里但馬と養目報モテウタナヒ
ウタニシジト付但馬酒徳の姿とあまき持モトハ長ヒト功名ト又上方能ド

臣、やき色ハ長政のよき事ぢや若武者とまゐるゝ着き時と改又ハ備後栗山と
お構づき相部は源の又その後の宮殿内とて海も大勢よ御すうそく
世恭年少ときと立ばまき功をなし滿徳いふと思ひとおと教訓事あとあらび
と之膝立坐し但馬と腹もせしめども汗と涙と下す但馬がたゞ向て左掌
想よか人のよき功名一あへと云う僻りうとて也せざる件もて長政とんぬとせば
長政いや又立されとひよと思ひとて、バ但馬打突ひんとあがりて少く身功ハ美
久事なきとひよと思ひとて、車ハ多き多無は不思するねまこと他ノれひむ
と唐突きとも然りとるよ將軍もと引見し世の利よくて幸う猶ほつると自質
かまうき外む言ひてこそ今近の傍軍よりて無るゆくのとくゆくんなら
ハ伏伏す直へし事方筋毛す附一足と引だ討死ハ殿のねあしそれハ大將の返す
い味方と以て人軍と腰と立ねよしの歴の聲もとむ一途をゆめのうつせき進退
萬々萬々一途ハがくわきしましに母生を仰の湯ハ傳後と老功の者をうる圓せば
浦住貞昌一人がくあて討死をう事ハ多齋者の業と死をみ度よ腰と大將の道

よひゆるよひ御詫候差と歎き旅一路と對と接て長政の無とあれ思ひみ承
さう御詫候のきひのうよめ要一がア付鄉よちのゑとて走りあそ政のうよ晚キ
怪と顧えび劬あるとて益としかき氣き因き如水の小性とて仰めハいとし
あひう少康の礼義招あへゆと渴とひきをハ長政おと高益と傾けらけ
りをとと但馬上鶴りゆく京還す五日よと云ひ色ハ但馬遙と多モ益と戴て
三日を引受け後故ハよし等すよ思ひねへ今日の往す無きりぬ一辭路と云
しゆを長政又西よ十日引受けられて但馬と申すを申すを申すを申すを申すを
一う鬼の如くちる房の勢をとせう松子と耳目と聲うせう當一因よ兵のまう
上鶴ひて酒宴をすゆり色ハ傳後寄る声よ若きとて無せられよ心正の跡まう歟
又立多ひきとて大とけハ但馬又れり一とて但馬と申すの勢の武官目を有る時と
よよ身も湯とくみをと申すと申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを
敵はとくみをと申すと申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを
申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを申すを

一 福島正則名を加茂人と諱す
トガ

龍巣正則をもて荒くれと説き奉事せりる所の云うて或時通るの士卒
の多ひて城内の糧は押こめ食ふを与へば餓死せりんともきしに士の恩を
支えし某邊境主罪からむる有様と痛み涙はれり候と號ひて被士
毛羅有様がくゆて海沿岸の譽勲とす一五色のと書くと罪主めん又版
主食ひうそを命財うそもよ赤色ハとく褐色と云しは某邊境主ハ因ドヘ、罪主
はまた後悔令し吾主公膳は殺さるハ主の有一は名の故モ助うらひ恩と
あて替せざるノトニ嘗て二事と云ふ事有る心ありとて吾志と定ムヘリと
口惜色とハ彼土怪ても人を乞ふ食ひ取れぬかくのじくアラクシ裕
跡て死するをもと西別乞食子供身しテ顏色アリヒ裏へば西別極六飯と

一而則平生多寡和好之私也由是急山嶽下與附西則

正則平生を參和するとして、お西園也殿下或は正則の茶饌よねえで
を別せば、やうせらせし事あり。源井殿供ひをめの爲まつたはし事などと正則
出處、どうり一いふべからず。もと源井殿の裏の正則が、ヨミテかくうゆとす拂てあつた源井
殿ゆゑて、くちきみづかの拂除して。ぬきものよりあつねづしと思ひき。一が殿に
まつべきものとて、おのの御子トミ主の比定より、おおむね付とひくあなる松

の物、かの年からその中の神をくわづかしてこまかに事とわまでて院すとけめ。

と足下のあ迎ひ一船をもよしとあせしとくらし協のあまひきうつてあるじ
の役し事よあんとて笑ふをほへど而別とひと鳥あつてをもとみと岸へくらひの

一荒あ村裏が持の有恩の歎慕を附長是を名表哥とよおう

厚よむく荒あごちの心處ひいそりうきな有恩の妹

このひ村重信長とと有き故とゆるかくし

一村重う參入浦和和泉とも者但母の城よみぐらうか前て辞せ一首よみを既

絶る葉とてあること改とか碑を自翁を一と年せ

至痛の身の消すと心拂うゆく向とうりくんミシテの求

一獨創字白子李翁よ云者あつ亨通の達者秀逸社序意郎ぬぢう移アニセ多毛
と照どと多ひうつ續生よ多毛今を獨創主と勝利の大功と傳く多毛を廣吉と
世人脚立よアシテソリと見四年度との武功と多毛多毛直人よ源だよとひちる
ちると獨創よ多毛の軍功と黙しり色ハ秀吉朝の大連對面し毛方全毛遠

本の事を感じ入らずと定め云産を仰らうトヨークも本庄より要ツヤ

福广なる三木あれと切符て相篠と山の大木とちる
秀吉大才感じ程と麻衣更とよへりきよ

一相列小糸の幕下佐健の敵を天徳寺豪健の家将ゴウケントシガ或對琵琶法師と接
平高と接らきとアタキよまく渉らみえよ琵琶法師ヒバフジ云うハ某ハ唯あきれるる
草木を含みれまじるして傍りゆといつて法師のねむと作ハシム本官節を繕カサグ
室鷹川の急流と詰り多天体ち衰カタマリてみ市と泣るまで今一世茶のどく
ありをさる事とアタクとハ那次与市家高が扇の的と後づきよ平家
す。もう天德寺又多源數カタマリ以及べり後リト家臣の少よもすりの平家ハいと
着後二曲たよる烈り多事とて仰れうち草カタマリ多とゆるよ厚よ仰感
涙よ咽をえて見よといふのうまてや今は不審な事につづると申す
ゆといふ天體のあどうとして其事とを名とねりしくとひりが今の一言を

そり一力を差しむを仕事と見えん陣とよく会合してそぞきて、松飼金井の蒲翁者
もと鍋うらの竈邊の瓶身も湯らぬ生唾とも湯も賜まじひやさきハモ申せ、
なくはるまと室瀬川と先陣せびと人よとこさせよを討死してあくびゆる事ト、
とおなまいとおもて出るをもとあしてえらきよゆきをなす事がへと志バ
源と城ひつて志ハ一物つてひる、又那波与市と大槻の中より摆たきて、
陳ひよ止一もうと海市よ落入て的もむうよかると海年あふ喝と、づり
是と名あらまゆし射抜しなば味方の若わうづかし馬上を獲うきやく
海ナ入むと是悟、とまつとあしてそらをめぐらし士の逸遊あらむしするあがみ
系をもはれ得ゆふ跡でハち鷹家あるらゆすて陰と夜を右の平あとす付
とあ人のふと口アヤモト益渕よとがましあうまみハあひきよかにと
やまくもつけと見ゆる者の隠れ唯一日の害氣もよやかせてよ実と
生るえとなきよと思ひ、ひまをとねり、めいことをゆーと云ーかも諸臣
を迷惑して辞なつてとす

一
やう老人のわ倍半の旅陣の時日根野備中守朝鮮傳より、
ダマウリ色巴ニ新あらとて墨田架木う縁百枚とやうり、
一ト架木の方へ引て一體となり、墨田架木をあらかじて人とよびてさきよ
ひし網三枚もあらかじて、骨と呑今吸ゆよして生せとりとあ人やうてよ不臣
タキよ渴ゆて二母指と取かて足一あは墨水らぬ初から一めの心もハなし合力も
心ぢうと再三あわせつて、も更ももーとや、又飲食の事はきみよしし網をも
えうよもひばあとおの手もつけてつまどミ事とも思ひよらざて朋友
急用のあはま強百枚とわーむべーとわゆる、是等の事はもと時代の士の
風俗俊素貨よーとあらと義とあひ、四年潔白なるとあがし翁室鶴巢
若き時のまことうやまひとての若き人などハ内の大うと古歎軍械の事とゆて
欲ひ君父のまふ武士の差悟などと食寝セーざり、或代りうき人の筋合とゆい
多く、勝を損得のあえき女在在無のうとす便りあるて一意の歎とやるハは

第五章 金品と其の始末の風よとを御歌と色又を以て加筆すまし地主女とソヒー士ら
を手取へとひし者を翁と呼じて又宗女うみ子みひーと人と稱とう金と奥
とお車すまほり車なきと海舟必まぐらかをまけて船はるあつゝよしと一
かへ船て秋よ始むる暴象戲は得るといまひゆきみせゆの也と傳うしことば
是へーがあをまき人とあとをとへうつ馬うとよらとびえもあうきねとひやく買
ぬてやうかしあるなどりと高實のまよすと士する者のもどくとまじき
る也又在朝井端後まづひしと見て傍の人の馬とあととあまくとまつゆまじ
き事と金品よとへたもとを金下よきゆくもとをゆくへーとあきくらされ
臆庵の唐名カラナときへるべし侍備の時 文廟トヤとやへるとて傍りぬを越理
ある車とそきへ士を一云の上ととつてく利欲隱病好色なるのひゆの
車のひだりと無擇言コレシトとこそ又なく不車ぢるとくべき色の世儒の
以文雅風流と寫アフととくと遊よ中らびとつれをとめじ今身の言行
と隆て後は文緒のあよりとて聖賢のそにてるありとんこれを和好、停て

自らの道の省くるとあくまでも、一から五事をもう後生を譲ることなげうし

色詩よいとく誰生ニ腐階タマニ至今鳥梗トリハシこの謂なり

一 北条氏直と京家勝と追うちき祭軍の時の歴角

氏名と流よろひを筑前川 淀カタシマとちやくある や衆

臆庵の氏名と流ひゆうひう逃てちかのーかのつるさよ

一 神農通三子息を遺て生前の軍のむ立など強ひるは子是望興わたのゆくまを
用とこゝる通三ゆゑとて留學の場を守りたとさきるハ士する者歎傷の内情を
呂毛武軍の教へなきハあらん革を好てヒツクづきるく内情の面あきよ吹と
て立あう小用とあしきとを寵ヒサシと云へうべ猪シバ猪シバと云ふと留學にこと軍の傍
少しきと居イジ尿ウラぬしすうとひそんハ赤の面目と云脣シラとを汝ミタと云ふと留學にこと軍の傍
あと繫ぐべしと泪と流してソモーラセドウとを汝ミタと云ふと留學にこと軍の傍
じ凡士する者文雅風流のと事として詩賦文章よほごろ文字の穿鑿筆硯
文房の具よと費す者を若士と云ふべ

御内閣外日向の為よりと只々を破り奉るにし忠義とか一君の為とよくされたり
或は立身し御行ともも廢衣歟とうりん食らきうん御すミコロ うりんと我身の為よりを
きども欲がひ過されハ或を多と恨ミ吉公へゆかひかへむどりをドリの
君の為とあまひゆらむ却る仇達の種トアラ考レ又君の為と才と豆子時ハ我身
ありし才をばほんと西へく義理とぞひうどとやかと君の為を身と全して居
一ウヒヤードと情ひも君の為に才若才とし或ハう候施等の爲めと嘆言と
君の為なきばずと名子恨をし是とま貴のま公人忠臣の士といふべし
そのことより君と名を申はれや君の為よと才とぞあひ

一山に豪傑者一豊後守が其を仕合し初め東國守の名庭ぢりとて安ちよ引來だあき
の者あり濱坂のあく音量をよろこび誠に二双の名もござりも價値ありも一そ
罗づまへ一人となむむかしくてゆんとひをひ一豊ハ猪をう耐トナセシム馬は
一く忍てども来る事叶ひぬあゆうて世のアキラの空手一き程はあーと車ハなし一
豊仕のモドウしゆる馬は多て人馬よりハ屋形のウ廻すと即ちばよと

と一豊の妻をとめて今馬の價いづれかと聞か黄金十両とそひひのきと
妻とはども思入泥りぬける求うてあひひと自ら馬をたべーとそ
境の屋の店を資金十あ飛出とあひて一豊大よむうきはゆひまづく
トモトモを車の多き内は母黄金うつともあひといに四箇くとつてつう
きんされ今は馬をばしは思入とあらまうきトウハ能び且ハ恨む妻を
のこすれぬれうみ仰ひおもハマシハズスの日本より海の下ニアリ
てあかうこ是れのうよ角々ハシテ海がまの一大耳からんせうまくセヨ
とえ鳴ひきそれぬれをくらべしなとあくハよのうのちもはいふなどて
多ひもむかまし銀うけを放てゆる様の有ベーノドキニあさむらんはば
國事天下れをあたる仕事の路じりの時うへと屋形の候事もえむるをあまくに
とやしされへとまほれして又馬をへと思へばこそあれとつて一豊やどもも馬
と未む程かく都より擁有し時滅國被は馬脚後前て大子落きぬひて天降馬や名馬
御行者のもとと仰奉し十色ハ赤玉牙の馬うそと賣へうけとあらしう附りと價

まくして誰と罵り可ひをありてゆんとせし山内が詔をひそかに信
長少一公便ちゆくの時信長が家をもハ天より男あがひ人なーと要らる
司をあらしとすをゆくとてんとを念の至りおはし山内ハ多々を派へとち
あと腰を下しゆんよしのう車の跡物こよ其ハ代もがみの私ととさき且
古御士のとてなづケ拂一と處一と處大とすとひ色とひ月と身と起てしを
一 稲葉伊豫守一徹の信も煙火とども信長心解けば教を勧みて茶事と爲り
主を席みて刺教以てと立ち年一徹故高座テラに入とて相伴の三人接拶と掛け
の縞の譜とすを云々是ハ韓退之の詩まで雲横秦嶺家何在雪擁藍闌
馬不前と云々一徹がし享間りて讀るは相伴の人をと聞て一徹仰
子細をあしタニバ信長壁歌よとすと走りと走りあて一徹よ荒陽廻斗ある
勇士と云ひ一は今づくも文多すと走りと走りと走りと走りと走りと
語るし今日のとてなしハ茶の湯よとすと走りと走りと走りと走りと走りと
三人皆懷劍を持ちて今日の承く致すほそと謀と改とよゆりと害ふと止メテ

いこれぞれを三人のお伴懷からぬ後と歴史一徹卒伏と死罪と仰せられ
奉くる私と因て今日殺さざるべきとゆうと奉りしはせん方なく毛派一人
ねむとあつてと存し用意けりゆとて是と懷劍とああして信ちよえをやけ
きハ信長強モ心と奉会らき

一 信長公方美昭卿へ自偈の時連寄師を願ひ二本献じり色ハ信長昂矣

二 本より拂ふとあ乃 印 般

一 ち概落葉西城を嘗めしる松山刑部少輔兼後入道松源寺三母侍中寺あ人と松永伏
恵み附弟し極と泣涙し天神馬場へ第ア信長偈をうけ友三母のやまと甲斐あく
城とあふと悟一と見るをまづり

着けハ軍を三船と極めても天下はきく人夕那

廉の身ハ為て行ゆるがまくよき名と説く細川

辛文細川と云ふといふ

一 永禄十二年七月十七日夜信玄門写鷹毛拂水毛づか一時甲府の門前

八幡の旗をもむの名をとふよ 竹田家もむよげて 信玄

旗ともむき心竹田の甲斐をよくよげてのゆき信濃まるさよ

一 元永二年七月吉氏康卒去下に瀧古河の坂下に鳥下寺大聖院を立ち位牌
を立らる法名を大聖院殿東陽岱公大居士と号し

一小糸氏邦軍兵五百人三月六日詰形と而て山中の城へ移る大次賀う士井
三多三百人と三日より酒匂りを直野より不伏至る時大次賀が駕車を以
阿波た是故正吉いよし流人として大次賀も不居うちりが京あちる關なむ色バ車
の傷をベーと伏不加くうしとなる故少半し大は恨み不論某を人をもよ伏て高
名めべしきを高野人の味あよえ立酒匂の直野は伏石う是ま屋主者よハ覓詫く
助か多す寺詮本角を萬の唯四人也二月八日モ別御形勢也高級人也バやう
ある如とた馬脚西吉と名乗突起るといひうる事なれどハ故大手厚き暗
もくし小勝と云いそ知び右往左往は近づうるを仰ま四人踏歩たる所と
陸と食と加農と等と號三人と突起るを降る馬脚敵一人と突伏せ首とお
となさざりとぞ

毛多の一馬首也敵ハ死くもあて近づくト三不の休見一馬よ起り是ハ仰服
少く許形勢の争はるを身自殺の助とも大力の副の者志士を忍してかる權源源
五路花け対名ととくも主役物ハ劉焉をあ人危く思つて之を仕事ア御本陣
守相支と助け被つてとくも主役物ハ劉焉をあ人危く思つて之を仕事ア御本陣
あり汝よ生捕よことをあらうる 魏帝嘆きの主役物ハ帝と云ひ胸あんと云ふ
と之を一馬よ伏とむし一馬よ陰と食き一馬よ首と云ふ三事お彼の名也
と慶天せらきなるをあ言小屋ノ延譽有く和て敵の首とねらはしよ候て軍
神の血氣よベーと獄つゝ梶原^{カケ}をさうは炎ヒテ あ衆狂みと至され軍人
となさざりとぞ

一 蓼山城攻の時福鴻家人福鴻母没大治去馬元林衆も仰可望方臺も門隣も、常
武と云ひお歎を念則りと見くやと城を為しきを引退ベーとト御方臺お拂わる傍
子首ニテ後殿は引退りう城中と云ふ者也が其房と感じ矢もとを性若と云ふ人

の者も橋浩を立仰り福應が萬々と人馬と名乗り居る。橋と袂の者
十四五人ばかりを城若狭地にて何んせ一と氏親押すて云うが、御事の主と会
下す教へと怪かしと驚く刻一色に亮き奉仰て左陣へゆきる城若狭は然と
四人の者と助ける北都より三段打四人の脇よびくる者と三拾四の
筒よて打るよ筋よ立し武者の胸板をわぬき後ヲ折し武者と解つの中り
助けよ倒せ死ドリ

一天正ハ子七月九日氏政氏輝自害し氏政辛ニ年とぞ才付氏連ハ高野山に
登山して後大坂より三段儀より上り物その言秀吉氏連は剣而しやさきるハ
本兵をもと一ヶ世假想とらべーと志す所存有る也十日アモ危慮を
取るせらる財才三千ニ年と算拂ふゆじする事とモ

一天正ハ子七月九日上洛並びに越前守と見人ヤマハ西家上洛セまし隠孫
至信院が一と云ひて秀吉とぞもつて餘るアモ西家侵者ともヒーく上洛に
至候人目とぞうやうを壁柱ニ年金筒とめりてだミ馬の先よ持ちる說よ

第レクセハ秀吉畠田左近と云て仰りハ西家更連上洛を隠孫なまくと名ふかひよ家
畠田左近信長を世の時君ぬすり安ちへ年より陳謝りしよれぬう御足急有
ベーナヤクル吉野は三家門籠ヘ士三人五員レキ高行倉八十命を夏威御守大町
信房寺とは少奇ハ又伊守は堺より大副の急を在ハ今みの大刀の急者也大町と
奥羽子便れかく別強の急を西家自身強弱の仰し時も比大町うち左近と云
大町信房と名前左近也おこる所しがて甚大名生仕し事ゆ列車の秀吉亞作
タクハ西家隠裡育室海ク自身自別の由文ミ工ハ陳謝の詞を多々しと宣ふ西家也
至徳文と経つう被化文をとまし差する秀吉見そ見えり人々一享一烹處の不
なしは上ハ源深證のやしと佐クリミ財家家やけハ山田より鐵と一束人細めの財
うれゆるよな仕ひ又祐寺とぞ助へハ跡別形よ至るを似ぢるよ左くも少々に似せ
らき上を是非不及保私底よ軍用す用多る別形内書別と右付て用の陸奥界
よ下の正多矣まつてへく多々立あを仰後有へしヌは龍鶴別と名のち、伏木公

年て大車内隠謀と稱立也文より發の判と用ひんを上に詮文の判形ハ似事
たりを極分明より某ノ刑形の筋鶴子を眼あつは心を列ハ眼かしは虚實と
由食儀五人よき日本の大名等へ歸する事無事う同会にて歎明主て爲つて
一ノイリの秀吉別大名等へ歸する事無事う同会にて歎明主て爲つて
悉く鶴鶴の判ハ眼かし又詮文の判形ハ眼かしは上を謀判と有るども
罪と宥らむ車頭を拂させらる。

一 天平九年六月下旬ち秀吉のわざと捨居トアセし不例ちつる七八日下旬詮文
秀吉必欲甚矣其ハ鳥色ト心神狂乱初モ大明と攻取國王と有らんと云ふ
は付士人の大老三人の中老並五まほもとあるとて原生と源氏と源氏各大臣
ゆきと善者人なし 家衆を心厚す人民の困窮しとあひ色タキハ充有
と宣げん秀吉 志麻の部色とんと志麻の色と研一美と相毛色利基而上
お者を充多す忠臣と毛利一と倫ひるは身を移すとけほそと併定
み及べる所

一 今ノ城攻の時城主の争は誰とハ知らず白糸の辯字無形である間と差し御者言は
の糸柄の陰相するよろと掛け致る大樂と交えりと音と振る延長石見守
毛利又元子井作本政モナクハ幕府の朱絛と奈良と御用すとぞと云なら
攻口へ地引件の朱絛と対食するが難く対食せぬと御朱絛すれ津地引之
本政モ向ひ泡の如く接とめてあつてと度言本政お笑ひ時とあんと度言と
毛利御子を疎かとぞんぞ重士公立へば且今の功名ハ跡一トビとて
更に信貴東ハセナクノ朱絛の參討と色ハ敵意力也爲うる引入クノ
毛利とすとひよかて脇と脇をし毒の矢と放つは中止と云奉がしたゞ
毛利の主と死せざるには勿づく

九月の城ミハナノ被程亮政莫攻のよを秀次氏と吉賀長政三が主し摂主ハ赤原三
木と立つて一揆於唯休せん、秀吉自ラ赤金さんと觸らざる御色テ安程亮政ニモ
協多力アと傳せらる。

一 銅鋒、沿海の人數二拾万七千五百七十人也名後陣は左陳しなまほの沿海せよ

と定めらるゝ人多きを 豊原一万多々人 因多衆五千百人を 大名おも事取金十万二千
石十石人を遣る沿海の人數及熱軍勢会三嘉萬九千九百人を記する今年文祿元
年と明治四年十一月廿八日秀次園より住し天下の政事とつまどる是より秀吉と太閤より
一太田三栗が内は太田下野と云士よく人と識るを羽達ハナスリ三栗いうちの故ごと
と下理別のふれどいびととバ連亨する者の古事と見えハ我連歌の益
せんと士の功あと志は者とハナシモチノミの暗いねは仍てアーハハナス
ハ九条連ひぬにみゆのことをぞと見る

一 篠生氏卿の件は佐幸、鈍とつる名をもつて西川忠良といひは秋よ鶴也と
乞筆しうハ亘野某これとくを傳ひてあるては似う鶴と鷹ととひ色ぞ
氏公

かきこむと人よきつひてやみるよ一ひのこりいと 善へん

とおのの恵うつきとその地と鶴と鷹と色う又安井郡川の河而よ鶴也と
あきせ立ハ氏卿の假地ちしよ馬縁、修至政家の假也とを章の行ひしよ

氏公草の事記の序よ

うちのくのあまう事に及陽よ思こよれまと思はよこと
とようの事行ひよされしよツ人思ひを安達う事も屬一とくとくと明しと云政家
争ひとゆうとく

一小余早雲盲人を公用の者と山原假ちのくは峰と極て海よ下つけよ

せらとくと有一ひを言ひ人をすすめぬるを手代むと聞は申ひら色
五山行院とぞ

一 丞禄の中備翁上道郡、翁口止の候。完不治給免者と云者あり叶時浮田直家
脛よ浦上と減し沼城よ處と元老と婚類ありしよ元常毛利家よからひて
立家よすく重宗討滅さんと只つとも治の口を嘗まく大河甚平縁う要
害よあつては力攻よして兵がまねとなく矢陣よはと機、軍兵と義兵と並
家暴を勧と云謀り者よ審うよと云合を或時重宗を物あらの罷
あり摺りあき首と刎へと云色いを討すの士役向ふとくお奔して立家

候て惣軍大隊をば御駒を傍中と陽色あつたるが西那の内より食の老女の道よ
卧床するをうかうかしてはふと不思議の心がなくおもへるよひ志とぞるる事
ヤーは沙をあつて走路しき色さうとも済馬一きそく度やそとえをひきへん
如き時立別色なつう一の母上よどて連れぬる乞食の女、底見るも思へば飯を食す
ある身よあきを知る併すを有りて老弟よ不和也或時次シテあが車より來るる風の馬と盜
船山の城主源三木をも守が斜ま仕へ居あらる乞食の老女と己が母と名付て人貿す
牛しり。湧と水をなすて元弟よ不和也或時次シテあが車より來るる風の馬と盜
えあせお茶山下へ駆けり。城門と何とある事かとば、主君を再び入らん牧
石の原と赤い地に色を波く本も矢合をう見と見そ思ひぬむ討止よと
下をしき色とく川をも流り城下兼上う船山の次と小士をも故なき小元
罪を免る事と人の知れせずて道色ありてあきらへぬて逃る者の者た向ヒタチら
てはゆすよ蓬カツラさきゆと云ひ色巴乞をと山下よ陽ト金きり游スルあが士見是す
詫色くるとと御くべかの乞食の老女と河原を引あしゆくば母と教ひ代えと声く
守らせゆり

一 上列筆蹟の母を長野ヒ信濃ヒの名を本庄ヒとすよ興味を變へて後
家に向へ五六尺半の板あつはせ男とよびあひへて後見ヒあすこのせいかる地か

よほううう墨キリハ老女をもととん拂つてうだ母子一やよ死んですとぞう
仲と死べま命と居ますまつ世憤りと殺ドケんと云ふるアト彼老女をも碑よーと
教しりきもく物少ミ母の仇因爲すあつてよーと恨と報めべきと萬
人をも嘆きとぞとぞ老女と心よりとぞう墨砲く返さくとき者もきばりとほ
若の軍兵と戦ひのをひのきのあは川向玉船をも小舟と隠し墨色よと告やつてお臺しりう
叔説のに至るのむのうは圓木の舟をもえ若軍源定あらわしをねと老女ハげの櫛
干よ傍り席とと目つとううと引絆て下は船ひ處る事で只の掛けの事あれど彦
づくやうて一刀利しもととお抜じ色を老女が首とあつ附し立つる小舟よ舞り
遙きるを老女の斜ヨ陽る乞食死して後隣の山の脚を唐すりと重盆軍印ひ入つて
守らせゆり

はと云々色ハ皆冒是とテ田舎育シタチの者とがひの初うつる御まひあるのを仲
乃の元まきをかくと笑ひよめし角てと金カネでと左の手と右の手とて祝の件へ而し
名彼女一肩の肩と書徳の肩の祝す張付祝の件へいよりうを肩よ
万喜れ肩のえれまやかすもあひの御の御きせますト

長脚殿を肩連の達人あせば母里ときめ色ゆ、和テるす方葉を矣よ
淫裏のありの石と我事とあつてあうこと御り御と縁をもとを離ふい
御有を擇の幸以肩送すあうこと御り御と縁をもとを離ふい
一から末代色自分、而してすもほ在ひ事一と申す付色ハゆきしる

常山北遊道をゆき一辺の也

一池西家のまよ政の忠勝十八年の時づきの而まと有一や即ハ賜入公の弟と
有し時徳葉伊福寺一派の御。備前の大通とさうと居らきう政の兄弟と
是ハ性を知りぬれをもゆくとお列をひらげし恩を取ましめ
仰うるう内の事とお碎きと申す事十ヶべと云賜入海カタマリ御安禮し豫列

因の弟とお碎くべくハ碎てとすと云詠とアラク音とみてとくと懐よ入し侍るる
のちよむかと年とあくび對面せらきしよ政の御ニヤンと申し備前王と號
ふる爲よひに以てあなきと云す一やばと云まつて柱とおてお碎きつと走り
おり色も一段と止りよとやかせらきしよかけとてゆうう賜入ハ政をうづと
い一定侍とお碎くべし巻き事ととて門内と御をし御はゆうあう志と
そぞし志と一色ととくとくの久ととあしとおてお碎くべくハ碎
度ハ一言と僅と有べき事ととすとてし若う御と無能な色と碎くべくハ碎
て足よとはまあとけらき若き事の骨と刻すと大袖やむへまや道色を拂ひ
參幸ひと以後と傳ひと云う

一母祖山城谷おね笠野力登徳葉内通中恩道在波邊勵善房过古作と有の物あつて
武富と励ミ天下七名跡と云一と云う

一竹中せた萬重法云く多は五弓價とひく馬と購カウべうひもとすとての財よき
欲とえを追説て忍下んと思ふ又捨と全んとわづまつて副の下人後う

さきはは馬のねまめびし又ひる馬をばう一とアハハあ牛て放とのどん草刈り
毛づき馬あよ御て名を失つ事と有べしセ士を重十兩もあと賣んとある
やうふをも求ひし惜ードとあくをやう安放してよりま財を捨ともすし
相立の金まで又馬と求ひしるを蹠てばやね有べきと身とす義もよろてあら
ゑもがしまへて販室とや鹿苑とも思ひぬうをうすあらびきこを士の本意
りうと云ふこと

一明智光秀が士野に袁山中鹿之助は主て功名せん事次間の鹿之助也而ま
主の御の御の也然ひにうきよと云う物とせの事一と不思を後仰の誠を
川陽は野にあらゆ御は終焉は引くねをえ、いへ時山中が教一組とい
あしむ縁ともう日と舉きゆどづりて日と算きする内の中よわの具一と
者大さ一わを抜ては一路流りあると見三四とさつてはま日とあらゆ
こきぞ押並つて引頸て首とぬうう博よ志願主と我主室の功名せん
一かの歎大さ一わよみつるをとくとく坦あきらむなうの又ねあよせと目

因うそぞうつるをいたと傳ひゆる

一道化達子野の信長の信長は仕つくしとおとせ功勝も一とよ信長の達子野が
さ一わよおぬ道化とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
平野と吉野ハ汝の御の士ちるが是と武功是と色もく信長もとねうき一と
往て平野は村田の時道化とあづきくね語セ一と道化云く自身ハ多るよ先
こち同よ嚴とつまると奉く倍りて教へらきよとてとてとてとてとてとてとて
神義西よ冥加よけの士をもと討死しつきすめうてまその軍はきを心元とひ
つをと武富のあま政は死と遁じ今日の間よりハ敵の上の御よ運ととて
道化すて貰今のおま政は死と遁じ今日の間よりハ敵の上の御よ運ととて
一と大よ墨を廻ド一と

一信長の養がち婚の財産の湯惟子と御の娘と大よ席すてあし茶生を娶る
山城がお老の妻院と原の妻を多子とん瞻とつぶしあをうなはせば人よ七立
三の式法ほどハ不都合をんとお使とみて田舎の妻の大ちと用意せよと云

信長宿主を以て東京西へと調子く山城守対面又船を説きよりの七立三の式法
と角の山城嘆へて曰我事と嫌りあふもすうとそひを告ふた事と保徳車ち
とハシ信もよそらさんと思へとし

一明智日向守云仏のうとと方便 と云武士のうとと云若と云百姓町人等が云
さることを名言也

一利家公ゆ傍よ五仕ア色の者の中の称をなす時ゆ腰舟をらきてくわ鑓と接伴
者杯はま一日の内ヨハ二三度も金子ニ両づくめもづく下着き者を就くいれ
ぬ事有ゆのゆ傍てあらんら作はよひと云ふ事は想ひるども

一三好柳原大文長義玉井をほく天子と支配したる三好豊前守之康入道實
休と河内の急にす所より永禄五年三月音ト島山尾張守吉政根末法師等と和解
の久萬ノ御て実休討死の長義ハ服をのゆまを連章無行ひすが時節の

薄よりる芳の一ひ

今附まざらひ長度と續りと極ひかく御は實休討死の告り封書

披て是と見不言へことを書と傍よ金^キと聞あはくと爲へて

古派の漢^カくとくう野とひりく

滿益大子廢^ハ附もりうて曰實休歎のあよ討^セ今日本の連章此句を止^ベ一

とて即時もと催し既^ハ太勝とねらひ

一公方半眼^ハ絹^ハ織^ハ事度のあよニ奉^ハ献^ス一印^ハ紺^ハ上^ハ色^ハ川^ハと^テと^テ信
長江門渡^ドと「ニヤウモトのる^クのよろとひと川あらゆ^リ色^ハ絹^ハ

年つまく五代万代の^ハ有^ムよ

一天正元秋八月廿日信長江村の合戦^ハ大利^トは破竹の勢^ハを相^ハ奮^ハ勢^ハの勢^ハ
と進^ハて遂^ハ其^の勢^ハを反^ハはる反^ハはる山城長の守吉家^ハを朝倉家の武運^ト今^ハ是^ハをことと
差^ハりき^ハ今^ハ守^ハの後殿^ト目^ハまーく歎^ハて討^セせんと云ひ定^ム

あるとよく曾^ハあつての令^ハと云^ハせや今^ハの秋^トまづり

と古事^ハ口走^ハみよ色^ハと松山の河全安慶守宗清^トうゆく

おとから^ハと^テと菊川の川一流^ハ、身^トや^テぬ^シ

セ景と古事記と思ひあつて以ちもる説考歎後行忠を矢立の観を取牛し義理
味方下れを詩一首を故卿へぞ美うくる

萬恨千悲有葛然

誰圖今夜瀧黃泉

故卿更莫成愁淚

死曝戰場只是天

吉隆は城曰勢曰飯茶勢不先とは逃さドと攻占すと附山邊江口の管を刀

称後の峰を而て西に以れすと軍して皆討死を遂うくる

一無農お令色文武二途となること一月ハ誰をあらゆる事ぢ色ど古、今の物がじ
ツアヤキトモアリ川の美なると能く無く三宅觀瀾曰彼以文立チ我以
武立ツ掌者須先識此體制一は倍これ要旨とねうとあべしや矣、吉圓曰、
諸臣と文官武官となる事の例となりり行き令條との時より古、
走ウニミエは省く武き送とて仕あるを貴とみるよて院は令の定ラ有て後も
あるの相をもれこれとまうるある諸臣とまーとまのくわハナ伴緒七十氏
よりる肩をと多かつてソシ

一天運深く達季は物事殊珍すと事珍私を重用後く繁く様敏の佑起じ
より始、度重のひる度重の制度などよ傍ひあふ事、がもむかみつて文事のみ
拘りぬ方へくなまうきて、皇祖親戎裝とめづ詰問するの天威わとう、終
よりそそくのほどこくいみじき聖代とキセー後よこしめり純友が道傳東ぬ
絶子よからせーハ時運のあがくもる示とがなずる上文華は流して武事とびし
朝憲の海即よ衰がるの急をうがや是すと就て世のけりあるども中古んよハ之と
上古よ既て之とあせよ強むと事と抑文と仰とせばて、其とのを高ぶとよハ而
らば志うる人の決戦ハ少武寫うる參るる多し但害氣をもつて送理と
掌よきハ血捷暴ノ事ヨリて犯レ陵の罪と見られんを又文事のよく偏ハ
惣執をうる處よす色邊をこき行ハセし勇士ハ萬々千人ノ如きともう登敷
一にて名とあらめなとく准教のとなく云づるの氣象忙懶ヲ呈しハ年十
余年苦痛と守り忠孝と恵むる者ハ多く車れやうと見つて色智仁厚

天性よりあることを理と仰り計らてを業するときは、智と謀とを施せしし玉事
式微オトロしへの徳神は多く武家うち昇進するつて平忠度シマツと以雅アヤにて
崩ハラスあらずよし士の種類は軍ヒサシ水禽トリのねぎは、邊ヒタチと帝ヒタツと止る
を途上ヒタツと死と畏ハラスと一ヒハなりとすと、平家ヒタチ奪ハラスの争は長ヒタツ且ヒタツ
萬ヒナガタの不作文アリタテ無ナシ氣カクの涵養カヨウ薦ハセスと御ヒメと之と
之と在ヒタツ考ヒタツより天子の御身ヒメと雄偉ヒラフ一ヒハ浩平ヒロヒロと云
夫ヒタツとく内ヒタチ考ヒタツなりづく跡ハラスくましく天の永命ヒロミツとももくをたゞヒタツと
後ヒタチ天皇ヒメを文ヒタチ事ヒタチに優ハラス智ヒメをし、后妃ヒメ宋牛ヒツキと一ヒハ金鈴ヒメイ壽永ヒツキ室劍ヒツキの没ハラス
と情ヒタツをうき親ヒメ刀ヒタチ造ハラスて御ヒメ面ヒメ情ヒタツと至ヒタツし、皇威ヒメイと歎ハラスを
えい小條ヒタチが本望ヒメと御ヒメ輔ヒメをヒタツとヒタツ聖惠ヒメや生ヒタツんヒタツとヒタツ當時の事記ヒタチと
名令ヒタチ情ヒタツをヒタツほしゆうじヒタチ、び支ヒタチ小平氏ヒメ観鏡ヒメの初ヒタツと包ハラスし、源將軍
の後ヒタチと三ヒハ追ヒタツ、數ヒタツの主ヒメをヒタツ者ヒタチの不顧ハラス

奪ハラスの追ヒタツと引ヒタツつを援ヒメ君ヒメと勇ヒタツとをヒタツ録ヒメせ、從ヒタチ不帝院ヒメ征討ヒメの由ヒタツとゆうつ
義時ヒタチ義ヒタツを取ハラスる事ヒタツと云ヒタツて、李ヒメと義ヒタツと發ハラスし、事ヒタチ攻ハラスす。攻ハラスすと、をヒタツかべしとヒタツし天子親
小平ヒメ姫ヒメをヒタツ攻ハラスす。至ヒタツるは、恐ハラスと断ハラス、冒ヒメ工ヒメ罪ヒメと奔ハラス錢ヒメの下ヒメ族ヒメと下
知ヒメる。こそして日本ヒメ見ヒメよヒタツめヒメばしを後ヒタチ達ヒメの礼ヒメ事ヒメつヒメ晨ヒメ、南船ヒメ。

事ヒメし、夕ヒメハ小平ヒメは羈縻ヒメせらきし人ヒメと云ヒタツよ和ヒタツましハ幾ヒメビカウヒメる。されば、左
平記ヒメは大塔宮ヒメ勅答ヒメす。左ヒメあひて曰ヒメは、財上ヒメ感ヒメ収ハラスなく、ハ不必ヒメ、日暮慢ヒメの意ヒメあり。しさ
き、巴文武ヒメの二道ヒメ回ヒメく、主ヒメを治ハラスむ。今ヒメの無ヒメ居ハラスし、剥髮ヒメ深衣ヒメの絆ヒメ飯ヒメし、虎賀
裕ヒメの威ヒメを捨ハラスて、成ヒメす。於ヒメて、財上ヒメと食くせん人ヒメ誰ヒメぞ。と、あはれ、も、いと、くつろ、惜ヒメき事ヒメ。うそ
ぬヒメの忠實ヒメれんヒメよ、桶中ヒメ廢ハラスとヒタツし、ひし、新田ヒメ景貞ヒメを、廢ハラスす。桶中ヒメ廢ハラスとヒタツし、と
大平ヒメの機ヒメを、あはれ、と、新田ヒメ景貞ヒメを、廢ハラスす。從ヒタチて、軍功ヒメ一ヒハ、後の職ヒメと、殊ヒメさきし桶正
信ヒメの、師ヒメを、か否ヒメの、を、ゆと、監ヒメ。こうと、退ハラス付ヒメて、おはなし、かを、叙ヒメる。

皇室女と云ひて鳴りてと或人をも見て測らるるのよしハかよし體の聲と
旗の色とを固く辨て文也とぞうしも義直の詔とハ無窮也と是道義と
守りし忠孝の實烈うべし又人世の悦ぶ不と毫毛不計すと爲せの歎ノ不
掌間淫威こ有る汝を嗤笑ふて御事と云々あざむ士馬立隊す一そ
達の杜義と日と暖うし筋骨と筋し心志と困り事なく奮りと忍ミ貨と
昇て風俗より穎て商賣と報と因りもべし 皇帝推古公氣概而文掌
となくれ制を備らばきと無の人がうのをぐれてせかよ海を天地のる自
然の人道うて情意にめはひへがつむあがし程中 諸島被除の功化う
清淨ぢとどもとある風儀を元釋と志との俗若たりあるよゐたのれ
多不潔行も多く浴ちと稀らまて時々大布と湯を浸し皮膚と拭ひ
ふくのみなうぬを廁す登りて身を沃かずと仰いハ肺布盤すと革手と
綿入食ぬと蓑ゆる於彼のあくせなり我祁えといはす御廁下とも廁より
きて水つゝをぬなく飯籠と襖禪桶等多別も革手を以て我祁手放てハ
ヤセし。

難承教とぞ收一トハさうるは假ハる年と屢と多事の經ヒトス石とモ弑殺一ト
ねもとせざるハいふとも閑田氏曰西の國丈假ありて或く之慶史と號稱
て事極とぞする事あらずと考證量と云ふ事とぞと謂しと長陽す事
處人日本イレ相模としてハ輒と肩をも想るとすん我祁手も馬子も君を弑し
事多きと側目一トも宣傳太子などどうる也と文傍憲法と仰あさせしと
生立の本根、ついをじて弑はすからし故ナサムニ車殊し文少經革殊れると



5973

